

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ昔話集』<sup>メルヒェン</sup>（一八五七）試訳（その二）

鈴木満訳・注・解題

お断り

編著者ルートヴィヒ・ベヒシュタインに関しては、鈴木満訳・注・解題「ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』<sup>メルヒェン</sup>（一八五七）試訳（その二）」（『人文学会雑誌』第四〇巻第四号、二〇〇九・三月）の「まえがき」をご参照ください。

なお、右の末尾に、

目下のところ底本としてはヴァルター・シエルフ<sup>↑</sup>の注とあとがき付きで、ルートヴィヒ・リヒターの一八七葉の挿絵が入った下記を用いている。Ludwig Bechstein: *Sämtliche Märchen*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt 1972.

と記したが、今回以降は、これに加えて、ハンス・イエルク・ウター<sup>(2)</sup>編の下記の校訂本をも用いる。

Ludwig Bechstein: *Märchenbuch*. Nach der Ausgabe von 1857. textkritisch revidiert und durch Register erschlossen. Herausgegeben von Hans-Jörg Uther. Eugen Diederichs Verlag. München 1997.

これは *Ludwig Bechstein Märchen* として二巻本。第一巻が DMB (一八五七)。ただし挿絵は一切無い。第二巻は NDMB。「世界の民話」Die Märchen der Weltliteratur (略称 MdW) シリーズの一つである。共に簡単ながら、古語、方言などドイツ語圏の一般読者にとって難解な語彙一覧が、収録された昔話番号別に付いている。また、シエルフ注釈テキストには稀ながら存在した誤植が、こちらでは訂正されている。また、MdWの方針に従い、全ての昔話<sup>メルヘン</sup>の注中に AT 番号とそのタイトル (AT の英語タイトルではなくドイツ語で) が必ず示されている。

ただし、注自体はシエルフ注釈テキストの方がずっと詳細なので、両テキストを相互に補完させるのがよろしかろう。

ちなみに訳文中の「」内、その他の部分の〔〕内は訳者の補足である。

#### 訳注・解題略記号凡例

- AT アンティ・アールネ／ステイス・トンプソン編著『民話の語型』 Antti Aarne / Stith Thompson: *The Types of the Folktale*. Suomalainen Tiedakatemia. Academia scientiarum Fennica. Helsinki 1964.
- ATU ハンス・イエルク・ウター著『国際的民話の語型』 Hans-Jörg Uther: *The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography*. 3 Vols. Academia scientiarum Fennica. Helsinki 2004. ATU の増補改訂版。
- BP ヨハンネス・ホルテ／ケオルタ・ホリーフカ編著『KHM 注釈』 Herausgegeben von Johannes Bolte / Georg Polivka: *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. 5 Bde. Georg Olms Verlagshandlung. Hildesheim 1963.
- DMB (一八四五) ルートヴィヒ・ベヒンシュタイン編著『ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein: *Deutsches Märchenbuch* (1845).

- DMB** (一八五七) ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein: *Deutsches Märchenbuch* (1857).
- DS** グリム兄弟編著『ドイツ伝説集』 Brüder Grimm: *Deutsche Sagen*. 第一卷(一八二六)。第二卷(一八一八)。
- EM** クルト・ランケ創始／ロルフ・ヴィルヘルム・ブレードニヒ編『昔話百科事典』 Begründet von Kurt Ranke. Herausgegeben von Rolf Wilhelm Brednich zusammen mit Hermann Bausinger: *Enzyklopädie des Märchens: Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung*. Walter de Gruyter, Berlin [ua] 1977.
- HdA** ハンス・スピトルト＝シュトロイプリ編『ドイツ俗信事典』 Herausgegeben von Hanns Bächtold-Sträubli: *Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens*. 10 Bde. Walter de Gruyter, Berlin / New York 1987.
- HdM** 『ドイツ昔話便覧』 *Handbuch des deutschen Märchens*. 1) のうち2巻のみが一九四〇年までに刊行された。EMの前身。
- KHM** グリム兄弟編著『子どもと家庭のための昔話集』 *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*. 初版第一部(一八二二)・第二部(一八二五)。決定(第七)版(一八五七)。
- MdW** 「世界の民話」*Die Märchen der Weltliteratur*. Begründet von Friedrich von der Leyen. Herausgegeben von Kurt Schier und Felix Karlinger. Eugen Diederichs Verlag, Düsseldorf/Köln.
- NDMB** (一八五六) ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『新ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein: *Neues deutsches Märchenbuch* (1856).
- VdD** ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス著『ドイツ人の民話』(一七八二―八六) Johann Karl August Musäus: *Volksmärchen der Deutschen*. 5 Teile.

一三 黍泥棒きび

ある町にとつても裕福な商人が住んでいた。邸には大きくて素晴らしい庭が付いていて、地面の一部には黍(3)が播まいてあった。さてある時——折しも春のこと、種は活き活きすくと芽を出していた——商人が庭を散歩していると、なんとかとも腹が立ったことには、けしからぬ泥棒のせいで前の夜のうちに黍の芽生えの一部が筆むしり取られているではないか。毎年商人が黍を播く庭のこの一画はとりわけとてもお気に入り場所だった。人が何かにとことんのめり込むのはよくあることだが。商人は泥棒を捕まえてこつぴどく罰するか、法廷に引き渡してやろう、と決心した。そこで三人の息子たち、ミヒエル、ゲオルク、それからヨハンネスを呼び、こう言った。「昨夜泥棒がうちの庭に入ってわしの黍の芽生えの一部を筆むしりおつた、で、わしはひどく怒つておる。こういう破廉恥はれんちなやつはとつ捕まえて、後悔させてやらにやならん。せがれたちや、これから幾夜か一人づつ交代で一晩中寝ずの番をして欲しい。泥棒を捕まえた者には豪勢な褒美をやるう」。最初の夜起きていることになったのは長男のミヒエルだった。彼は弾丸たまご込めした拳銃ピストル(4)、三挺ちようと切れ味の鋭い偃月刀サーベル(5)を一振り、それから食べ物、飲み物も用意し、暖かい外套にくるまると、花盛りの接骨木にわとこ(6)の後ろに座り込み、ほどなく前後不覚で熟睡してしまった。朝明るくなって目を覚ますと前の夜よりもずっと広く黍の芽生えが筆むしりされていた。庭にやって来た商人はこうしていたらくを見て、息子が起きていて泥棒を捕まえる代わりに、眠り込んでしまったことを知り、更に立腹、息子を叱りつけ、拳銃や偃月刀もろとも自身だつて盗まれかねない、まあなんとも頼り甲斐のある夜警だわい、と嘲った。

次の夜起きていることになったのはゲオルクだった。こちらは前の夜兄貴が携えた武器の他に棍棒を一本、それから丈夫な縄を用意した。けれどもこのご立派な夜警のゲオルクもご同様寝込んでしまい、朝になってみると、例の黍

泥棒はまたしてもしたたかに窺り取っていた。父親は怒り狂って、こう言ったもの。「これで三番目の夜警が安らかにお休みあそばしたら、黍の芽生えとは完全におさらばだわい。そうすりゃもう夜警の必要も何もありません」。

さて三夜目はヨハンネスの番だった。なんのかのと言われたけれど武器は持って行かなかった。けれど、眠らずにいないでも大丈夫な、効き目はかねて試し済みの防具はこっそり装備した。藪あぶみと茨トゲの棘を探し集めておいて、夕方の警護場所に出掛けた時、これらを体の前に置いといたのである。なにせ、こっくりするたんび、鼻っ面をちくつと刺されるものだから、すぐまた正気に戻ったわけ。真夜中間近になると、とつとこつとこ、という音が聞こえた。これは次第に近くなり、黍の芽生えに入り込むと、ヨハンネスの耳にせせとむしゃむしゃやる音が聞こえた。よしよし待ってるよ、と若者は考えた。すぐ捕まえてやるからな。そこで懐から繩を出し、棘なんぞは音を立てないように押し退けて、そうっと泥棒に忍び寄った。近付くと——ね、何だったと思う——その泥棒ってのはさあ——とっても可愛らしいちっちゃな仔馬こつまだったんだ。ヨハンネスは内心嬉しくて堪らなかった。それに捕まえるのに何の苦勞も要らなかった。その小さな獣は進んで厩うまやまで随ついて来た。ヨハンネスは厩の扉をさちんと閉め、それからまだたっぷり時間があったので、自分の寢床でのんびり眠った。朝、兄たちが起き上がって庭へ下りようとしたところ、ヨハンネスが自分の寢床に横になって眠っているのを見てびっくりした。二人は弟を起こし、前夜見張り場で待ち伏せしさえしなかったとは、結構この上もない夜警だ、とかなんとか、ありとあらゆるいたぶり文句を並べ立てて嘲った。けれどもヨハンネスが言うには「まあお静かに。兄さん方に黍泥棒を見せてあげる」。そこで父親も兄たちもあとに随ついて厩まで行く羽目になった。そこには世にも奇妙な仔馬がいた。どこから来たのか、だれのものなのか、皆目見当が付かない。仔馬はとても可愛らしい様子で、華奢ですんなりした体格、その上全身銀のように白い。そこで商人は大喜びし、勇敢な息子のヨハンネスに仔馬を褒美として与えた。ヨハンネスはありがたく受け取り、黍泥棒①と名付け

た。

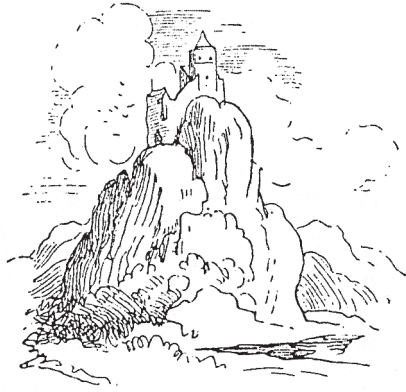
暫くして兄弟たちはこんな噂を耳にした。ある美しいお姫様が魔法に掛けられて硝子の山ガラスの上(8)にいる。おっそろしくつるつるするからだれもてっぺんまで登れない。でも首尾よく山頂に着いてお城の周りを三度回る者がいれば、美しいお姫様を魔法から救い出し、この方をお嫁さんにもらえる。これまでたくさんの連中が際限もなく馬での山登りを試したが、どれもこれも元通り下へ転がり落ち、死んで辺り一面に横たわっている、と。

この不思議な話は国中に広まり、三兄弟も、運試しをやらかしの硝子の山へ馬で出掛けて——なるう事ならその美しいお姫様を手に入れよう、という気になった。ミヒエルとゲオルクは選たくましい若駒を買ひ入れて、その蹄鉄をうんとこさ鋭くさせ、ヨハンネスは自分の小さな黍泥棒けんに鞍を置き、こうして幸運獲得の旅が始まった。間もなく三人は硝子の山に行き当たり、まず長男が登った。でも、あーあ、——乗っている馬は足を滑らせ、騎手もろともずでんどうと倒れ、馬も人もどちらも立ち上がることを忘れてしまった。でも、あーあ、——乗っている馬は足を滑らせ、騎手もろともずでんどうと倒れ、双方、馬も人もこれまた立ち上がることを忘れてしまった。今度はヨハンネスが登った。すると、たつたか、たつたか、たつたか、たつたか、ヨハンネスと黍泥棒は山のとっぺんに着いたんだよ。それからまた、とつとこ、とつとこ、とつとこ、とつとこ、とつとこ、ヨハンネスと黍泥棒は三度お城の周りを回ったの。黍泥棒はまるでこの險吞けんのな路を百遍も走って見たかようだった。お城の扉の前に立つと、これはさつと開いて、出て来たのはうっとりするように綺麗なお姫様。絹と黄金きんづくめの衣装を纏い、嬉しそうに両腕を開いてヨハンネスを迎えた。そこでこちらは急いで仔馬から下り、典雅なお姫様を、これすなわち、わがものとなったすこぶる付きの大幸運を急いでぎゅつと抱き締めた。

それからお姫様は仔馬に向き直り、いい子いい子してこう言った。「おやまあ、ちびのおいたちゃん、どうしてわ



たくしのところから逃げ出したの。そのせいでわたくし、許された夜のたった一時間さえ山の麓の緑の地面の上で過ごして楽しむことができなかったじゃないの。おまえがわたくしを乗せて硝子のお山を下りて、また登ってくれなかったから。もう決しておまえ、わたくしたちを置き去りにしていなくなったりしてはいけませんよ。——これでヨハンネスには、自分の小さい黍泥棒がこの世のものとも思えないほど美しいお姫様の持ち物の魔法の仔馬だ、ということが分かったわけ。



さて、兄さんたちははずでんどうから立ち直ったが、ヨハンネスは二人を二度と目にする事はなかった。だって、硝子の山の上の魔法のお城の中で自分の天使と一緒に幸せに、そして浮世の憂さ辛さを免れて暮らすようになったんだもの。そしてまた、このお城への道を人の子が見つけることはもはやなかった。だって、魔法は解け、お姫様は掛けられていた呪いから救われたんだもの。本当の救い主であり夫となる若者を自分の許に連れて来てくれたお利口な仔馬のお蔭でね。

#### 解題

ヴィルヘルミーネ・ミュリウス嬢 *Fräulein Wilhelmine Myrius* (生没年未詳。テューリングンの小都市にして保養地テルマル *Thermar* 出身の作家) がテューリングンの民間に口承された昔話として記したものによる。材源を同じくするのは D M B 一〇、一一、一三、一四、一六、二七。

K H M に類話はない。ただし、導入部は K H M 五七「黄金の鳥」*Der Goldvogel* のそれと似ている。

A T、A T U 五三〇「ガラスの山の王女」*The Princess on the Glass Mountain*。

原題 *Hirschedich*。





一四 黄金きんの牡おしののろ鹿

昔むかし二人の可哀そうな兄妹があった。男の子と女の子で、女の子はマルガレーテ<sup>(9)</sup>、男の子はハンス<sup>(10)</sup>という名前だった。両親は死んでしまっており、財産なんかこれっぽっちも残してくれなかった。そこで子どもたちは物乞いをして暮らすために、世の中へ出て行かなければならなかった。仕事をするには二人ともまだ体はできていないし、小さかった。なにしろヘンスヒエンはやつと十二で、グレートヒエンはもつと下だったから。夕方になると子どもたちは行き当たりばつたりの家の前に立って、扉を叩いて、一晩泊めてください、とお願いするのだった。善良で思いやりのある人人に迎え入れてもらい、食べ物飲み物を恵まれることは

もう随分で、憐れみ深い男のひとや女のひとが着る物を施してくれることも少なくなかった。

こうしてある時夕方一軒の小さな家の前に来たことがあった。これはぼつんと離れて立っている家だった。窓をほとほと叩くと、すぐに一人の老婆が顔を出したので、ここに一晚泊めてくれませんか、と訊ねたもの。「かまわないよ、さ、入るがいい」という返辞。でも二人が中に入ると、女はこう言った。「あたしはおまえがたに一晚お宿をしてあげるがね、あたしの亭主がそれに気付こうものなら、おまえがたはおしまいだよ。なぜってね、亭主は若い人間の炙き肉が好きなんだよ。だもんで、子どもが手に入ると皆殺しちまうのさ」。これを聞いて子どもたちはとても心配になった。けれどももうこれ以上歩けなかつたし、とつくに日が暮れて真つ暗になっていた。それでまあ、おとなしく女に一つの樽の中に隠してもらい、じいっと静かにしていた。でもなかなか寝付けなかつた。ことに一時間ほど経つとずしりずしりという男の足音が聞こえ、これはどうやら人喰い男らしかつたんで。間もなく確かにそれと分かつたのは、そいつが唸るような声で、人肉の焙り物を料理しておかなかつた、と女房にがみがみ言い始めたから。朝になると男はまた家から出て行つた。そのどずどずという音があんまり大きかつたので、結局とろとろまどろんでいた子どもたちはそれで目を覚まされた。

二人に朝御飯をあてがうてから女房はこう言った。「さておまえがたも何か手伝いをしなくちゃ。箒が二本ある。二階へ上がつてうちの部屋を掃いておくれ。部屋は十二ある。でもそのうち十一だけ掃除して、十二番目はね、後生だから開けちゃいけない。あたしはその間ちよいと出掛けるつもりだ。あたしが戻つた時済んでるように、一所懸命やるんだよ」。子どもたちは熱心に掃除をしたので、すぐに仕事は済んでしまつた。さてそうなるのとグレートヒェンは、開けることが禁じられているので、見てはいけないことになっている十二番目の部屋に何があるのか知りたくてしかたなくなり、ちよつと鍵穴から覗いた。すると黄金の小さな素晴らしい車とそれに繋がれている一頭の黄金の牡

のろ鹿(12)が見えたんだ。そこで急いでヘンスヒエンを呼び、中を覗いてご覧、と言った。それからおかみさんが帰って来ないかどうかまずよくよく眺め回し、婆さんの気配も無かったので、素早く扉を開け、のろ鹿ごと車を牽ひき出し、下に着くと、二人とも車に乗り込んで、さっさと逃げ出した。でも間もなく、老婆と人喰い男が、盗んだ車で走って行く道を、よりにもよって向こうからこっちへと歩いて来るのが遠くから見えたんだ。ヘンスラインは言った。「ああ、妹や、どうしよう。ぼくたち、あの年寄り二人に見つかつたら、もうおしまいだ。」「静かにして」とグレートヒエン。「あたい、効き目のある呪文を一つ知ってるの。これ前にうちのお祖母ばあちゃんから習つたのよ。

薔薇色の薔薇がちつくり刺すぞ。

こちらを見ても、こちらを見るな(13)。

するとすぐさま子どもたちは薔薇の花束に変身、グレートヒエンは薔薇に、ヘンスラインは棘きずに、牡ののろ鹿は茎に、車は葉っぱになつた。

さて二人が、人喰い男とその女房がそこへやって来ると、女房は綺麗な薔薇を折り取ろうとした。でも薔薇の棘がひどく刺したので、指から血が流れ、婆さんは怒って立ち去つた。年寄りたちがいなくなると、子どもたちは急いで出発、ごんどん車を走らせると、間もなく麴こがぎつしり詰まつた麴こ焼き竈かまどの傍にやって来た。すると麴こ焼き竈から「おいらの麴こを出してやり、それらを車に積み込むと、またまた彼らは車を走らせた。先に行くとき、大きな梨の木リンゴの木の傍にやって来た。これには熟したみごとな実が一杯生っており、木の中からまたしても「うらがの梨を

揺さぶり落としてくんな、うらがの梨を揺さぶり落としてくんな」という声が響いたんだよ。グレートヒエンがすぐさま揺さぶり落としてやり、ヘンスヒエンが手伝ってせつせと拾い集め、梨を黄金の車に積み上げた。それからまたしても葡萄の樹の傍にやって来た。これは感じの良い声で叫んだ。「わたしの葡萄を摘んでよう、わたしの葡萄を摘んでよう」ってね。グレートヒエンはこれも摘んでやり、車にしまい込んだ。

さててそうこうするうちに人喰い男とその女房は家に帰り着き、子どもたちが大事な黄金の車を牡ののろ鹿ごと盗んだのに気付いて恨み骨髄となった。全くこんな具合にこのご兩人、随分と前のこと、あの車と牡ののろ鹿を盗み、それどころかその際人殺しもやらかしたのだった。つまり本当の持ち主を無残に殺害したわけ。のろ鹿を繋いだ車はそれ自体だって大層な値打ち物だったが、そればかりじゃなく、どこへ行くかと、だれもかれもから、それが木だろかと野苺の茂みだろかと、竈だろかと葡萄樹だろかと、授かり物が貰えるという飛び切り結構な特性を持っていた。こういうしだいでこの連中、つまり人喰い男とその女房は、正直なやりかたじゃあなかったけど、長年車をわがものにして、上等な食べ物を頂戴し、豪勢な暮らしを楽しんでいたのだった。で、自分らの車が盗まれた、と見て取ると、すぐさま出發、急いで子どもたちの跡を追い掛け、貴重な盗品を取り返そうとしたのである。人喰い男は追い掛けないから人肉の焙り物のことを考えると、口に唾が溜まってしかたがなかった。なにしろ子どもたちをとっ捕まえて殺しちゃおうと思っただけね。老人二人は大股でずんずん子どもたちを追い掛け、すぐにその姿を発見した。遠くからだけどね。てのも子どもたちは先を進んでいたの。さて子どもたちは今度は大きな池の傍に来た。これ以上前進できなかつたし、渡し舟も橋もなかつたので、池を越えて逃げられもしなかつた。ただ楽しそうに泳ぎ回っている鴨がたくさん水面に見えた。グレートヒエンは鴨たちを岸に誘い、餌を投げてやって、こう唱えた。

「鴨ちゃん、鴨ちゃん、集まって、

あたいに橋を架けとくれ、あたいが向こうへ渡れるように」。

すると鴨たちは仲良く心を合わせて泳ぎ集まり、並んで橋になってくれたので、子どもたちは牡ののる鹿と車ごと無事に向こう岸に着いた。けれどもすぐその後から人喰い男もやって来て、いやらしい声でこう唸った。

「鴨公、鴨公、集まって、

わっしに橋を架げるんだ、わっしが向こうへ渡れるように」。

鴨たちはさっと泳ぎ集まり、老人二人を向こう岸へ渡した——って、そう思うかな。いやあ、とんでもありません。池のまん真ん中の、水が一番深いところで鴨たちは散り散りばらばらに泳いでっちゃったんで、邪よこしまな人喰い男は婆さんもろとも深ふかみ処こにぶくぶくして、死んじまったのさ。それからヘンスヒエンとグレートヒエンはとても裕福になっただよ。でも、授かるお恵みをどっさり貧しい人たちに施し、善いことをたくさんした。なぜなら、この子たちがまだ哀れな境涯で物乞いをして廻らなければならなかった時、どんなにまあ辛かったことか、しょっちゅう考え

解題

ヴァイルヘルミーネ・ミュリウスによる。

KHM一五「ヘンゼルとグレーテル」Hansel und Gretelとの類似は人喰いのモテーフと子ども二人の名前に留まる。物語の中心モテーフは「黄金の牡ののろ鹿」の発見と呪的逃走 magische Fluchtと邪な者たちの溺死である。パン焼き籠からパンを出し、梨の木から梨を落とし、葡萄の木から葡萄を摘むのは、KHM三四「ホレ夫人」Frau Holleの親切な娘の善行と似ている（ここでは授かり物なのだが）。

AT、ATU三二三「呪的逃走」The Magic Flight + AT、ATU四八〇「親切な娘と意地悪な娘」The Kind and the Unkind Girls。

原題 *Der goldne Rehbock*。

## 一五 痲癩筋の話 かんしゃく

昔むかし一人の騎士がいた。たつぷりの金子きんず、たつぷりの所領の他に妻も持っていたが、これがまた痲癩持ちで、夫はどうしても言うことを聞かせることができなかつた。こんなに性悪な女はまずまあこの世にまた見つからなかつたろう。騎士はと申せば非の打ち所の無い人物で、穏やかな性格。二人の間には娘が一人だけあつたが、母親はこの子を自分の怒りっぽい流儀で、自分の型に合わせて育て上げたので、娘は性悪の根性曲がり、いらいら屋のぶつくさ屋になつたしだい。さはさりながら神様のお蔭でこの女の子は麗しい乙女に成長した。そこでその姿を目にした者は、最初こそ愛らしい善意の化身と思つたが、いくらか知り合いになると、すぐさまその性悪さに気づき、てんから遠ざかつた。さて乙女は十八歳になり、夫を迎えてもいい、と思つたものの、妻に、と望む者なんて一人も出て来なかつた。

これがとても気に懸かつてならない父親は、ある日のことこう言つた。「娘や、おまえの母さんの流儀や母さんが傍はたから知恵を付けるせいで、おまえは連れ添う夫を持ってそうにない。よしんば娶めとつてくれる男があつても、わしみたいに女の悪巧みをひたすら我慢するつもりなどさらさらあるまいから、一年の日数ひかずよりも多く殴られ、こんな具合に何事につけても母さんの言うなりであるし、言うなりで来たことをひどく後悔する羽目になるだろうよ」。

温良な騎士殿の娘はくそもしろくもない思いでこれを聴いていたが、かんかんになつていわく「へへんだ、お父上様。随分お説教をなさいましたが、おっしゃることはただの一つも気に入りませんわ。母様にもしよつちゅう結構なご教訓を垂れてらっしゃるけど、あちらはありがたがっちゃいませんよ。なんにもご存じないくせに。お好きなことをやって、わたくしの方は放つておいてくださいませ。だって、明日にでも、わたくしを妻に欲しい、と言う求婚

者がおいでになつても、結婚している間はこの長めの小刀をいつも身に付けているつもりですからね」。

「おお、娘や」と父親は答える。「そんなことを考えてるなんてよくないなあ。おまえの性悪な母親よりましな人間にならうって思うべきだ。さもないと、仮に夫ができたとしても、それがきっぱりして一本気な男なら、おまえをぎゅうと押さえつけ、おまえはさんざつばら恥をかかされた挙句がへいこらしなきやならん、てなことにならうさの」。

「あれまあ、さようでございますように」と娘。「市場が閉まらないうちに、まだまだどつさり同じような弱麦酒<sup>ワケ麦酒</sup>が買えますわよ」。それからこうした憎たらしい嘲りをもつと父親に浴びせ掛けたので、騎士は立腹してこう叫んだ。

「ああ、この癩癩持ちのクリームヒルトめ<sup>⑬</sup>。父親に従う気がないなら、背中にたつぷり打擲<sup>うちまわく</sup>を食らうがいい。おまえを妻に望む者があれば、騎士であれ、下僕であれ、おまえを進呈いたします。そしてその男の思うがままに引きずり回させてやろうぞ」。

「それともわたくしの方がこちらに思のままにあちら様を引きずり回すかも」と娘は傲然と切り返し、この遣り取りが終るまでなおもいろいろ論じ立てた。

さてこの善良な騎士の城から三哩<sup>マイル</sup>ほど離れたところに住んでいるまた別の騎士だが、金子と所領は豊か、結婚の望みを抱いていた。容貌は端正、礼儀作法は典雅。隣人の息女が麗しく、同時にいとわしい女だ、という噂の数数を耳にして、こう考えた。思い切つて求婚いたそう。そして隣人の娘の性根を淑やかに叩き直し、善良にするのだ。それが叶わずとも、美貌ということだけでもその乙女を娶ろう、と。そこで馬に乗ると、数人の親戚とともに少女の父親の許に赴き、令嬢を戴きたい、と頼んだ。こちらの騎士がうら若い求婚者に娘の受けた嫉<sup>しつけ</sup>ぶりを打ち明けると、相手はこう告げたもの。「そのことはよくよく承<sup>うけたまわ</sup>つております。されど、なにとぞご息女をそれがしの妻に賜りたい。神様の思し召しで二人がただの一年でも夫婦暮<sup>めおと</sup>らしができましたら、ご息女がどれほど善良になるか、お目に掛



けましようぞ」。——これに應えて未来の舅しゅうとの言うよう「神様があれの曲がった性根しょうねからそなたをお護りくださいますよう。用心めされい。なにしろあれが母親の鬚ひげに倣ならおうなら、あれの生きている間あれの傍ではそなたに一日たりとも安穩な日はあるまいでな」。けれども求婚者はどうしても決心を翻さなかつたので、契約が結ばれ、青年騎士が次にやって来たなら、すぐに乙女と一緒に連れて、居城にお興こい入れさせる、との縁談が纏まとまつた。

母親はこうした約束について大なり小なりどころかこれっぽっちも知らなかつたので、このことを耳にした時、突とつ拍びょうし子もなく腹を立て、娘を呼びつけていわく「娘や、いいかい、あんたがもし、あたしがあんたの父親にいつでもどこでも諍しづかいやら手ひどい口小言こごとやらで逆らつてるように、あんたの亭主に逆らわなけりや、あたしの呪のろいが降り掛かる、と思いな。これから言つて聞かせることを聞くんだよ。あたしがあんたの父親のところとこに嫁よめいだのはほんの小娘の時。あんたよりずっとちっぽけだつた。なにしろあんたはもう女一人前だからね。三週間のもの、あんたの父親はあたしが病気になるくらい引つぱりたいし、元氣付けの飲み物といっちゃあ水しかよこさなんだ。それでもあたしは喧嘩に勝つたし、今日までずっと自分の権利を言い張つて来たんだよ」。

「母様」とあえかな姫君はのたもつたもの。「申し上げときまますけど、わたくし、千年生きたつて、夫をお猿さんわら「啖はらい者」にしてみせますわよ」。

そうこうするうち興入れの日が到来。かの騎士は高価な素晴らしい馬にまたがり、一頭のほっそりした風グレイハウンド犬を供に、片手には良く仕込んだ鷹を据えてやって来た。あつさり乙女を迎え取ると、駒の後ろ鞍に乗せ、だれも同行しないよう従者たち全員を先に送り出すなり、即刻花嫁の父に暇いとひ乞こいをした。こちらは別れに当たつて切切たる言葉ことばを掛けた。「おお、娘よ、神様のお恵みがそなたに随まいて廻まわりますように。神様がそなたに幸せな安息と、このわしが妻に見出したよりも穏やかな心とお授けになりますように」。



こう言いも終わらぬうちに、母親が騒ぎ出し、大きな声で後ろから娘に叫んだ。「あたしの言葉も聴いておくれ。生涯の間ご亭主に従うんだよ。あたしが教えてあげたようにね」。すると娘も叫び返した。「大丈夫よ、母様、教えてくだすった通りにいたしますわ」。

さて、二人つきりで一緒にバカバカ進んでいたが、騎士は花嫁の性悪さを懲らしめるため街道を逸れて、歩き難い、険しくて狭い脇道に入ってしまったものの一哩ほど騎行したが、せわしなく馬を進めたので、僅かな間にその荒れ果てた、踏みならされていない石ころだらけの小径を半哩こなした。ぐるりを茂みに覆われた川中島に差し掛かる。と、鷹がいかにも鷹らしく羽ばたきを始めて、手から離れようとした。青鷲の群に襲い掛かるうとしたのである。騎士は言った。「羽ばたくのは止しにせい。さもないと、きさまの頸を引きちぎるぞ」。それからすぐに鷹は一羽の鴉が飛んでいるのを見て、跡を追おうとした。すると騎士はまたして

も言った。「惑わされおつたな、きさま。厄介ごとを求めて、おとなしくしていないなら、即刻判決を執行して遣わす。死ぬ、主命に従わぬなら」。そして鶏のように鷹の頸を捻った。

乙女はこうした科白と殺害行為に驚愕して、騎士を恐れ始めた。ところで小径はますます狭く険しく茨だらけになり、風犬は足を痛めてしまい、これまでのように馬の脇に随いて走ることがもはやできなくなった。革紐で牽いでいた騎士は犬をしょっちゅう引き寄せなければならず、これが厄介至極なので、風犬を叱り付けた。「このけしからぬ番犬風情めが。さようにこの身の手から逃れようとすると、面倒なことになろうぞ」。けれども哀れな犬は追いつくことができなかつた。すると、騎士は剣を抜いて切り殺した。

乙女は抗議の叫びを抑えつけたが、心は胸の裡で怯え上がり、悲しくて堪らず、こう考えた。神様、この男つたらなんて兇暴なんですよ。わたくしをこいつのところに連れて来たのは悪魔なんだわ、と。——騎士はというと、ぎらぎら光る剣を手にしたまま今度は馬を叱り始めた。「なんだって鼻を鳴らすのだ。どうして側対歩や跑足で走らぬ。きさま、なだらかな平地しか走らんつもりか。死ななきゃあならんな」。こう言われても、哀れな駒は側対歩で、それから跑足で走ることではできず、歩きぶりはかねて調教されたようではなかつた。すると、騎士いわく「妻よ、下りろ」。「はい。仰せの通りにいたします」と乙女。それから騎士も下馬すると、馬の頭を胴から切り落とし、こう言った。「きさまがこの身の意志に従つておれば、死なずとも済んだろうに。妻よ、見ての通りの事態だ。この馬、甚だ気に喰わなかつた。風犬も鷹も同様にな。したが、この身は徒歩で行くのは不慣れで難儀だ。それにさような鍛錬もしておらぬ。されば、これよりそなたにまたがって行く」。そして乙女に引綱と手綱を着け、鞍も装着しようとした。こちらいわく「旦那様、わたくし、きつとちゃんと旦那様を乗せて参れましょう。でも、鞍と手綱はどうかお許しあそばして、こよなくいとしい旦那様、鞍が無い方がゆるゆるとお気持ち好いようにお運びできますわ」。

「なんと、妻よ。鞍も引き具も着けずにそなたを御するのがこの身に似つかわしいとでも」と騎士は語気も烈しく言った。「そなたにはこの身の意志に逆らつてつべこべ申す悪しき習慣があるな」。そこでやむなく承諾すると、騎士は即座に馬同様に鞍を置き馬勒を着けさせ、口に馬銜を嵌め、しつかり持つておれ、と両の手に鐙をあずけ、乙女の背にまたがるなり、ちよつとの間、さよう、槍丈で三本ばかりも歩かせたが、こちらは重荷に耐えかねて気を失つてしまった。

すると、騎士は乙女から下りて訊ねるには「妻よ、早や息が上がつたか。——「いえいえ、旦那様」と相手は答える。続けて騎士いわく「ここは見事な草原だ。これなら側対歩(歩き方)で歩けよう」。乙女は両手両足で這い続けながら言った。「喜んでそういたします。父のお城の中庭にはたくさん馬がおりまして、側対歩の歩調はそれで覚えましてゆえ」。

「それではそなた、この身が望むことはなんでも進んで行かうか」と騎士が訊ねると、相手はこう返辞。「わたくし、千年生きましても、お望みのことを進んでいたします」。そこで騎士は乙女を立ち上げらせ、慇懃にその手を取り、礼を尽くして居城へと導いた。そこには騎士の友人たちが集つており、恭しく乙女に挨拶し、専用の部屋へと随行したものだ。これは大層な歓喜のうちに行われ、騎士の奥方はこよなく愛らしい女性になった。品格高く、躰良く、陰險狡猾とは無縁で、誠実、静謐、温和で、一点たりとも美德に欠けるところはない。賓客たちのもてなしぶりはまめやかでにこやか、背の君が、これこれをして欲しい、と言えば、良妻なら当然そうするように、いやな顔ひとつせずはいそいそとやつてのけるのだった。

さて六週間経つと、若夫人の両親が、どんな様子か、どんな風にあつて居るか見届けに、娘の許にやつて来た。母親はたちどころに、何が起つたのか、娘が夫にどれほど服従しているかを知り、かんかんになつて娘を責め立て、

こうどなりつけた。「ええまあ、この呪われたあまつちよめ。いやでも目や耳に入ったことから考えると、あんたがあたしの子だなんて思えやしない。ま、なんてこった。あんたは亭主の手下になつてゐるのかい」。そう言うなり、この癩癩持ちの母親は娘の顔やらなにやら手当たりしだいに引っぱたき、髪の毛に掴み掛かつてむし毛るは、ぶつは、罵ののしるは、大変な乱暴狼藉ろうぜきを働いた。若夫人は泣き叫んだ。「母親が叱り付けるためにここへいらしたなら、そのわけが分かるまで待つてくださいな。わたくしはこの上なく結構な夫を持つております。善良で真つ直ぐな氣立てですけど、だれかが夫の意志に逆らおうものなら、猛り狂つて、すぐにそのひとの命が危なくなるんです。ですから、母親、分別を弁えて、夫に癩癩を起こさせないよう用心してください。だって、怒り出すと、逆らうものがなんであれ、それに当り散らして殺してしまうんですから」。

「ほうほう、まだ明日という日もあるさね」と母親はせせら笑つた。「あんたの亭主がどんなにひどいやつだろうと、これっぽっちも氣にならない。あたしやあんなの、屁とも思わないよ。このばか女。こともあろうにあんたの母親であるこのあたしに、亭主なんぞを持ち出して脅しを掛けようなんて、悪魔まじにでも唆そそのかされたに違いない」。

「母様、わたくし、脅かしてなんかおりません」と娘は陳弁。「ただほんとのことを申し上げるだけ。忠告させて戴きますけど、夫にはもつとまじな挨拶をしてくださいまし。だって、お父様に向かつてするようなことをなさるものなら、お背中をさんざんに殴りつけますわ。それから、母様にはもうあんまりたくさん髪の毛はないけれど、それでもあのひとが引き巻るのに不足はありません」。

「やれるのは精精そんなことかい」といらいらした母親が応酬。「やつこさんがたとえ山ほども大きかろうと、あたしやあんなの怖くはないさ。ともかくにも怖くなんかない。あんたの父さんとおんなじでね。これで二十年になるが、あんたの父さんがあたしに何ができたかね。今だって毛筋一本譲っちゃあいない」。

年輩の女がこうした悪口雑言をしゃべり散らしている間、舅しゅうとと娘婚はある場所に隠れて一言一句聴いていた。老人は義理の息子にこう囁いたもの。「わしは貴殿が娘の頑かたくな気性を矯ため直してくれたのをひそかに喜んでおる。わしがあの世におさらばする折は、財産の一切合切を貴殿と娘に遺贈したい」。義理の息子は舅のこうしたありがたい気持ちに感謝した。すると舅は更に婿にこう言つた。「どうか良い知恵を授けてくれぬか。しょっちゅうわしに抗あらかつて、わしの人生をひどく惨めなものにしている貴殿のあの姑しゅうとあをどうしたらいいものかのう。せめてあれが死ぬ一年前にでもごうつくばりでなくなりさえすれば、殊ことの外ほか嬉しいし、わしの悩みも悉しつかい皆終わりだ」。

それを聞くと婿は、舅殿が止めようとなさらなければ、自分なりの遣り方で姑殿を直してみせまする、と約束した。舅いわく「わしは貴殿を止め立てしたりせぬよ。焼くなり煮るなりするのなら、そのための薪だつて運びましようぞ」。

騎士はすぐさますばしく屈強な下僕を四人召し連れると、激怒した面持ちをよそおい、老女が座り込んで、まだ自分と妻を誇そしり続けている婦人部屋ケムナーテへ赴いた。姑は婿の姿を目にすると、皮肉たつぷりに挨拶した。「これはこれようこそ渡らせられましたな、エンゲルハルト殿(26)」。「これはこれはまことにご鄭重なご挨拶でございますな、シユレヒトハルトの奥方様(28)」というのが騎士の対応。そう言いながら相手の傍にびったり寄り添い、「奥方、お願いでございます、ご夫君でもありわが舅殿でもあるお方への無礼な沙汰は止められい。本来ならばご夫君はそちらのお背中に櫛の物差で数限りなく打擲ちやうやくを加えてしかるべし。苦痛のあまり良き妻になるまでなあ」。「聞きまいらせたが、そもじ、これまで随分と切り殺されたそうな、グググク殿(30)。したがこれまでわらわは五体満足でおりまするえ。これからもそうでありたいもの。して、わらわがそもじに何をいたしましたとな」。

「この身にとつては舅殿、あなた様のためにはご夫君であるお方に来る日も来る日も罵詈雑言ばりぞうごんの数数、ためにあの方はみずからのお家であるのに苦しみ続き」。こう青年騎士は答えたが、相手は即座にこうやり返す。「引つ掻き猫と

いうのがわが家でのわらわの名。ここではわらわはわが身を動かすも同様に夫を思うがまま。わらわが生きている限り、神様が夫に安らかな日を賜うことはたんだ一日もあるまいぞ」。

「神様のお恵みがあれば」と義理の息子。「われらがお別れる前に、奥方が悪巧みやら悪洒落と縁を切るよう処置いたす」。

「なにとぞおしくじりあそばしませぬようにな」と老女。「さもなきや——シャーフハウゼンのあの大きな神様のご加護がこの身にありますように——そもじはそのせいで赤っ恥をかいてさんざん誹られるって下さいよなあ」。

「あなたがどうしてこうも分からず屋で癩癩持ちなのか、それがし存じておりますのだ」と騎士は言葉を継いだ。「奥方は臀部の双方に癩癩筋なるものを二つ持つていて、こうも根性曲がりなのはそのせい。それを切り取ってくれる者がいれば、まっこと重畳。さすれば、あなた様はどんなご婦人よりもご機嫌麗しく、ご夫君にとつて良妻そのものとなりましょうぞ」。

「はい、そもじがかような名医だとは嬉しいことよの。その腕前のほどをわらわが娘に教えてやってたもれ」が返辞。「鋸草や嚏根っこも売り物かえ。飲み薬には蓬も混ぜるのだらうのう」。

「いやはや、あなた様のご嘲弄は大したもの」と騎士は叫んだ。「したが、すぐにぶちこわしてご覧に入れる。癩癩肝と癩癩筋をこちらのものにしてしまえば、子どもより善良で真つ当におなりだ」。

「えい、このおしゃべりめが。あなたの長口上なんぞもうんざりだよ」と奥方はがみがみ。すると下僕たちは騎士の合図に応じて女に手を掛け、ぐいと押し伏せた。娘婿は大きな鋭い小刀を研ぐと、服と下着を通して片方の尻に長く深い傷口を切り開いたので、奥方の嘲り笑いは途絶えた。次いで騎士は一塊の肉片を器に投げ入れながら、こう言った。「ご覧あれ、あなたは多年悪妻であったが、それはここな癩癩筋のせいでござった。もうすぐそれとおさら



ばさせて進ぜる」。女はといえば横たわって悲しげに「あたし自身はそんなことは知らなんだ。だけど、それをあたしに教えてくれたのはあんたっていう悪魔だ、ってことは分かっているよ」と喚わめき立てた。

「さよう、あなたにはまだもう一つ痲癩筋がおありだ」と騎士。

「もう片方の足に。こいつも切り取らなければ」。

「ああ」と相手は泣かんばかりにかきくどく。「これはとってもちっちゃい。そんなにあたしの害にやならない。神様、お助け。

悪いことはなにもかもあんたがもう切り取っちゃったのせいなんだ。あたしはもう痲癩とは一切縁切りになったよ。これからはおとなしくするから、どうかもう一つは切り取らないでくれ」。

すると娘が背の君に向かって暗れやかにこう言った。「なさることをよおくお考えになって。わたくし、心配ですの。別の痲癩筋なんてのが出て来なくなつて、あつちのをお取りになつたのは大変なお仕事。それで、もう片っぱの痲癩筋を切り取らないでいらつしゃると、そのうちそれが子孫を増やすんじゃないかしら、つて」。

「いや、いや、そんなことはない、いとしい娘や」と母親は叫



んだ。「どうか、あたしに手を触れないよう、旦那様に言つて聞かせとくれ、あたしは改心するからさ」。

「母上様」と若夫人が答えて、「あなたは、夫に抗うように、夫に従わないように、とわたくしに知恵をお付けになりましたね。このひとがわたくしの父様に辛く当たっているのはこれのせいですわ。さ、旦那様、このひとの痲癩筋を切り取つてくださいます」。そこで騎士がもう片方に取り掛かると、相手は叫んだ。「いやあ、いやあ。もうもうほんとにたくさんだよ。娘や、あたしがおまえをお腹に入れてたことを思い出しとくれ。そして、ご亭主と仲直りさせとくれ。誓つて、これからは真つ当な生き方をするつもりだ。そして優しく公正な神様があたしを痲癩からお護りくださいますように。大きい痲癩は騎士殿がもうあたしから切り取つちまった。小さい方は卵一つの値打ちもありやあしない」。

「よろしい」と騎士。「このひとが仲直りをしたい、とおっしゃるなら勘弁してやろう。しかし、手を挙げて誓つてくれなければならぬ。このひとが痲癩を抑え切れなければ、自分から進んで切つてもらう、とな」。誓いが済むと、女は体を起こされ、傷に包帯をしてもらつた。

さてそれからというもの奥方は喧嘩口論はさらりと打つちやり、淑やかな良妻に変身、すさまじい痲癩とはおさらばした。そして翌日になると、夫とともに義理の息子に暇乞いをし、婿殿は婿殿で、神様があらゆる災厄からお護りになりますように、と祈つてやつたもの。

さはさりながらその後になつても奥方は夫の気持ちを傷つけるようなことを一言、二言、ついつい洩らし<sup>(38)</sup>てしまうことが何度かあつたが、こちらはそのつどこう言いさえすればよかつた。「やむをえん、婿を呼びにやろう」と。すると相手は恐怖に顔を紅潮させ、「その必要はありません。あれがまいったもわたしの役には立ちませぬ。なんでもお気に召すよういたすつもりでございますし、仲良くやつて行きたければ、こう旦那様たちに言うのですよ、と、今



あなたに申し上げた通りをどの女のひとにも教えておりますもの」。

さてこれでお話はおしまい。男でも女でも皆さんこれを随意に教訓になさるがよろしかろう。もつとも、この話を物語った昔の詩人は更にかような助言もしておりますがね。

悪妻持ったら

始末は手早く、

かの騎士殿にお任せ申し、

櫓そりの上に横にして、

丈夫な縄(40)っこ買ってやり、

どっかの枝っこに吊るしちまいな。

狼二、三匹と一緒にさ。

これほど悪い梁はりをば渡した

絞首架なんぞ見たことあるまい。

悪魔のやろうをとつつかまえて、

間に下(41)げりゃあ別だけど。

解題

ラスベルク男爵ヨーゼフ（一七七〇—一八五五）編『歌の広間——古きドイツの詩集成』Joseph Freiherr v. Laßberg: *Liedersaal, das ist Sammlung altdentscher Gedichte*, 4 Bde. 1820-25, Bd. III, S.148 に於る。すなわち、古きドイツの韻文物語が材源。

傲慢・乱暴・強情な女性を謙遜・温良・従順に馴け直すというこのテーマはシエクスピアの初期の喜劇「じゃじゃ馬馴らし」The Taming of the Shrew でよく知られているが、これとて従来行なわれていた粗笨そほんなどたばた芝居の改作であり、こうした趣向が世の男どもに受けたからこそ、興行主がシエクスピアに改作を依頼したのであらう、と推定される。ヴァルター・シエルフは注釈の中で次のように記している。

このテーマはドン・ファン・マヌエル（一二八〇頃—一三四八、カステイリア王フェルナンド四世の甥）が著した古きイスパニアの小説・説話集『ルカノール伯爵』Don Juan Manuel: *El Conde Lucanor* で二度扱われている（この小説・説話集にあつては「当時のイスパニアにおける」アラビア文化との隣接、その頻繁な翻訳を忘れてはならない。殊に東洋の物語集成にはこの笑い話のモチーフが幾つも登場することもある）まず第五章、そして更に第四十五章にじゃじゃ馬女性の調教の話が出て来る。第四十五章では獵犬、愛玩犬（牡猫）、それから馬が順順に、水を持つて来い、と命じられ——その「不従順」のゆえに「婿に」殺されてしまう。この遣り口を真似ようとした男は失敗する。

A T, A T U 九〇一「じゃじゃ馬馴らし」The Tame of Shrew.

原題 *Vom Zornbräuen*.

一六 胡桃くるみの小枝

昔むかし裕福な商人がいた。仕事のことで遠国おんごくに旅をしなければならなくなった。そこで別れを告げる時に三人の娘に向かつてこう言った。「いとしい娘たち、わしが帰り着いたらおまえたちを欣よろこばせてやりたい。そこで何を土産にしたらよいか、言つてごらん」。「お父様、わたくしには素晴らしい真珠の頸飾けいじりを」と長女。「わたし、金剛石ダイヤモンドの嵌はまった指環ゆびわが欲しいの」と次女。末娘は父親の胸にしがみついてこう囁ささいた。「あたしには綺麗な緑の胡桃くるみの小枝をね、父ちゃま」。——「よしよし、いとしい娘たち」と商人。「忘れはしないぞ、それでは息災いきざいでな」。

遙か遠方へ旅をした商人は大規模な商品の買い入れをしたが、娘たちの望みもちゃんと覚えていた。長女を喜ばせるための高価な真珠の頸飾けいじりはもう旅行鞆かばんにしまい込んであったし、同じように値の張る金剛石ダイヤモンドの指環ゆびわも真ん中の娘のために買ってあった。ところが緑の胡桃くるみの小枝となるとどんなに苦勞してもどこにも見つけられなかった。そこで帰り道は随分な距離を徒歩にし、旅程が何度も森の中を通ると、そろそろ胡桃くるみの木が見当たるのでは、と期待した。でもこうした期待も長いこと裏切られ続けで、そのうち善良な父親は末っ子で一番可愛がっている子どもの無邪気な願いを叶えてやれないのではないかと、憂鬱ゆううつになり始めた。

こんな風に悲しい気持ちで旅程を辿っていると、やがて小暗おぼろい森の中に入り、密生した藪の傍を通り掛かった。その時被かつていた鍔つば付き帽ぼうが何かの枝に当たって、霰あられでも降ふって来たみたいにならばら音がした。上を向くとそれは綺麗な緑の胡桃くるみの小枝で、一房の黄金きん色の実みが下がっていた。男は大喜びで片手を伸ばしてその素晴らしい枝を折り取った。でもその瞬間茂みの中から一頭の荒荒しい熊が飛び出し、商人をすぐにでも引き裂きこうといった様子で、獐どう猛もうに吠え猛もうつて後脚で立ち上がった。そして恐ろしい唸り声でこう言った。「なんできさまはおいらの胡桃くるみの枝を折つ



た、ええ、どうしてだ。おいら、きさまを喰つちまう」。怖  
さのあまりぶるぶる震えながら商人が言う。「おお、熊さん、  
わしを喰わないでください。そしてこの胡桃の小枝を持った  
まま旅を続けさせてください。そのお礼に大きな燻製塩漬  
豚腿肉ウエルストを一本と、腸詰ウエルストをどっさり差し上げますでな」。けれ  
ども熊はまたこう唸った。「きさまの燻製塩漬豚腿肉も腸詰ウエルスト  
も要らんわい。きさまが家に帰り着いて最初に会おうものを  
よこすと約束ウエルストしさえすりゃあ、おいら、きさまを喰わずにお  
いてやる」。商人は喜んでこれに同意した。なぜって、飼っ  
ている彪犬ウエルストがいつも自分を迎えに走り寄って来る、と考えた  
からで、自分の命が助かるものなら、これを犠牲にするのは  
やぶさかではなかったしだい。ばしりと荒つぽく手打ち「取  
り引き成立の徴ウエルスト」をすると熊は不恰好な足取りでおとなし  
く藪に戻って行った。そして商人はほっとしてそそくさ、浮  
き浮き、その場所から立ち退いた。

黄金色の胡桃の枝は故郷に急いで帰り着いた商人の帽子の  
縁でみごとにきらめいていた。一番下の女の子は嬉しがって  
いとしい父親を出迎えようと飛び跳ねて来た。例の彪犬は猛

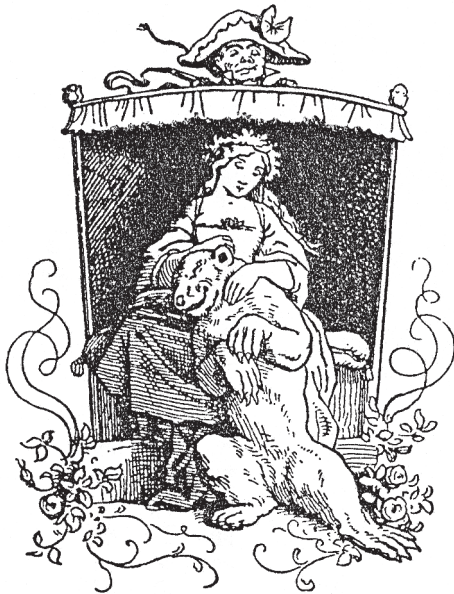
烈な勢いでびよんびよん走つてその後を追い掛ける。姉娘たちと母親はそれよりいくらかゆつくり玄関から姿を現し、到着者に、お帰りなさい、をしようとした。商人がなんとも仰天したことには、飛び跳ねて出迎えた末娘が一番乗りだったのだ。がっかり悄気返つた商人は有頂天の子どもの抱擁から身を振りほどき、まず家族と挨拶を交わしたあと、胡桃の枝のことで自分に何が起こつたか報告した。一同泣いてしょんぼりしたが、末娘はなんとも勇敢なところを見せ、父親の約束を守ろう、と決心した。暫くして母親はうまい解決策を考え出してこつ言つた。「心配しないでいいのよ、皆。ねえ、いとしいあなた、その熊がやつて来て、あなたが熊と交わした約束を思い出させたら、うちの末っ子の代わりに家畜番の娘をやるの。熊もその子で満足するわ」。この提案は、もつともだ、とされ、娘たちはまた朗らかになり、父親が出した綺麗な贈り物がありがたく喜んだ。末娘はもらった胡桃の枝を肌身離さず大事にし、間もなく熊のことも父親の約束のことも全く念頭から消え失せた。

しかしある日のこと、黒っぽい馬車が一台街道を通つて商人の家の前へがらがらやつて来た。そして怖らしい熊が馬車から下り、唸りながら家の中に入り、びっくり仰天した男を前にして、約束の履行を迫つた。急いでこつそり家畜番の娘——これはとても醜かつた——が連れて来られ、綺麗におめかしをさせられ、熊の車に乗せられた。そこで出発とあいなつた。外に出ると熊は荒荒しいもじやもじや頭を家畜番の娘の膝に載せ、こつ唸つた。

「撫でておくれよ、搔いとくれ、

おいらの耳の後ろを優しく上手に、

さもなきやおまえをまるごと喰うぞ」。



だもんで娘は掻き始めた。けれどもちゃんとしなかったの、熊は、こいつは騙くらかされたわい、と感付いた。そこでおめかしをした家畜番の娘を喰ってしまったおうとしたが、娘は死ぬほど恐ろしかったものだからすばしこく馬車から飛び降りてしまった。

それから熊はまた商人の家の前へ取って返し、ものすごく脅かして本当の花嫁を要求した。で、愛らしい女の子が連れて来られ、辛く悲しい別れを告げてから怖らしい花婿と一緒に馬車で行くことになった。外に出ると熊はまたしても、ごわごわ頭を乙女の膝に横たえて、こう唸った。

「撫でておくれよ、掻いとくれ、

おいらの耳の後ろを優しく上手に、

さもなきやおまえをまるごと喰うぞ」。

そこで乙女は掻いてやった。それもとってもやわやわと掻いたので、熊は気持ち良くて堪らず、おっかない熊の目付きも和やかになった。といったしだいで可哀そうな熊の花嫁も段段熊に慣れて来た。旅はそんなに長くはなかった。なぜなら馬車は吹き荒ぶ疾風はやてかなんぞのように突拍とつぱうし子もなく速かったから。間もなく二人はとっても暗い森に入ったが、そこに真っ黒けな口を開いてい

る洞窟の前で突然馬車が止まった。これこそ熊の棲処すまかだった。ああ、乙女がたがた震えたことといたら。ことに熊が鉤爪かぎづめの付いた恐ろしい腕で抱きつき、愛想の良い唸り声でこう告げた時にはね。「おまえはここに住むのだよ、可愛い花嫁。そして幸せにおなり。中で立派にふるまえば、おいらの乱暴な獣たちはおまえを引き裂いたりほしない」。そして二人が暗い洞窟に何歩か踏み込むと、熊は鉄の扉を開き、花嫁と一緒に一つの部屋に入った。これは毒のある長虫どもで一杯で、こちらに向かつて物欲しそうに舌をペロペロ突き出した。すると熊は可愛い花嫁の耳にこう唸った。

「振り向かないで。」

右手も見ずに、左手も見ずに、

真っ直ぐ進め。そうすりゃ安心」。

そこで乙女は振り向かずに部屋を通り抜けて行った。その間長虫どもはびくりこそりとも動かなかった。こうやって更に十の部屋を通り抜けたが、最後の「十一番目」には、有翼龍ドラッグヘや蛇ヒキガエル、毒で膨れ上がった蟾蛙(46)、バジリスク(46)や無翼龍リシトルムといったおぞましい生き物どもがうようよいた。熊はどの部屋でもこう唸るのだった。

「振り向かないで。」

右手も見ずに、左手も見ずに、

真っ直ぐ進め。そうすりゃ安心」。



乙女は怖くって怯えちゃって白楊やまならしの葉っぱのよう(18)にぶるぶる震えたが、それでもしゃつきり立って、振り向かず、右手も左手も見なかった。でも十二番目の部屋が開くと、煌煌こうこうと輝く光が二人を迎え、妙なる音楽が鳴り響き、そこいら中に歓呼喝采がどっと挙がった。花嫁が、大変なものを目にしたのでまだ戦おのきながら、今度はこうした不意打ちのめでたいさまをろくすっぽ考えもできないうちに、——恐ろしい雷鳴が轟いたから、天と地が崩れたか、と思っただ。けれどもすぐにまたしいんとした。森も、洞窟も、毒のある生き物どもも、熊も——消え失せており、その代わり、壮麗なお城、黄金で飾られた部屋部屋、みごとなお仕着せ姿の召使一同が出現。そして熊はこの素晴らしいお城の殿様である端麗な青年になっており、いとしい花嫁をひしと胸に抱き締め、自分と召使たち——例の生き物どもはこれだったんだよ——をこうして愛情籠めて魔法から救済してくれてありがとうね、と千回もお礼を言った。

身分の高い、裕福な奥方になった乙女は相変わらずあの綺麗な胡桃の枝を胸元に挿していた。これは決して萎しおれなという性質のもの。好運の鍵となった今はなおさら大事に体から離さない。間もなく両親と姉様たちにこの嬉しい巡り合わせが伝えられ、この先ずうとといいつつまでも安楽な生活を送るように、熊の殿様からそのお城に迎え取られたのだった。

解題

ヴィルヘルミーネ・ミュリウスが物語った民間伝承による。

まずまず類話と言えるであろうKHM八八「歌いながらびよん跳ぶ雲雀」Das singende springende Löweneckerchen では筋の混乱が見られる。「雲雀」の役割が不明でもある（案ずるにこのLöweneckerchenは魔法に掛けられてライオンLöweになっている王子の本質なのであって、これを末娘がなんらかの摂理から望んだため、彼女が王子と結ばれるのであろう。この昔話のように）。

A T 四二五 A 「怪物（動物）婚」The Monster (Animal) as Bridegroom。A T U 四二五 A 「動物婚」The Animal as Bridegroom。

原題 *Der Nubzweiglein*。

## 一七 心臓の無い男

昔むかし七人兄弟があつた。可哀そうなみなしごたちで、姉さんや妹がいないものだから、家事一切は自分たちでしなければならず、こいつはどうもありがたくなかつた。そこでお互い相談して、結婚しようということにあいつた。さて、兄弟たちが住んでいるところには花嫁候補がいなかつたので、兄さんたちいわく。自分らは余所よその土地に出掛けて行き、花嫁を探し当てよう、一番下の弟は留守番をしてもらいたい、で、これにもちゃんと綺麗な花嫁を連れて来よう、と。末の弟が、それでいいよ、と言つたので、六人はいそいそ浮き浮き旅に出た。その道中で小さい家の傍に来た。これは森の中に一軒だけぼつんと立っており、家の前には一人のごくごく年取つた男が立っていて、兄弟たちに声を掛け、こう訊ねた。「おおい、ぼつと出の若い衆しゆさんたちやあい、そんなに楽しそうにせつせこせつせこ、一体どこへ行くのかの」。「あいさ、おれたちやめいめに可愛い花嫁を連れて来ようつてのさ。それからうちにいる一番下の弟にも一人ね」と兄弟たちは返辞した。

「おお、若い衆しゆさんたちや」と老人。「わしゃあここで天涯孤独でたつた一人の暮らしをしとる。どうぞやわしにも花嫁を一人連れて来ておくれ。だが、若くて可愛くなけりやならんぞな」。

兄弟たちはその場から立ち去りながら考えた。へへん、氷みたいに鬚ひげや髪かみの白い皺しわくちや爺じいなんぞが若くて可愛い花嫁をもらつてどうしようつてんだい、と。

さてそれから兄弟たちはある町に入り、そこで七人姉妹を見つけた。いやもう望み通りにうら若くて可愛らしいのをね。娘らと結婚すると、一番末のを弟のために連れて行くことにした。道を歩いていると再び例の森の中に来てしまった。するとあの老人がまたしても小屋の前に立っていて、待ち受けていたというあんばいだった。そしていわく



「ほほう、律儀な若い衆だの。おまえさん方、わしにこんな若くて可愛い花嫁を連れて来てくれてありがとうよ。」——「いいや」と兄弟たち。「この子はあなたのためじゃない。この子はうちにいる弟のもの。おれたちや、弟にこの子を約束したんだ」。

「ふうん」と老人。「約束したって。なんとまあ、この子をねえ。わしもおまえたちに約束してやろう」。

そう言つて白い小さな杖を手にとると、呪文を二言三言むにやむにやと呟き、その杖で兄弟たちと花嫁たち

——一番末のは別にして——に触つた。すると皆灰色の石に変わってしまった。さて、男は姉妹たちの一番末のを家の中に連れ込んだ。それからというものの娘は所帯を切り回して、きちんとしなければならなくなつた。そうするのは好きだったけれど、いつも心配だったのは、老人が間もなく死んでしまふんじゃないか、つてこと。そして自分は、以前老人がそうだったように、こんな荒涼とした森の中に一軒だけぼつんと立っているこの小屋で天涯孤独の独りぼつちになつてし



まうもの。これを老人に告げると、答はこう。「心配せんでいい。わしが死ぬんじゃないか、とか、死んだらいいな、と思わぬこと。あのな、わしは心臓を胸に持つとらんのじゃ。それでもわしが死ぬようなことがあったら、戸口の上にわしの白い魔法の小杖があるで、これであの灰色の石に触るがいい。そうすりやおまえの姉さんたちと求婚者たちは救われる。それで仲間は充分だろうが」。

「胸に心臓が無いなら、一体全体この世のどこに心臓をお持ちなの」と若い花嫁が訊いた。「何でも知っておかにならんのか」と老人。「それほど知りたきゃな、わしの心臓をしまつてあるのは寢床の掛け布団だわい」。

そこで若い花嫁は、老人が家を留守にして仕事をしに行くたび、一人つきりになると老人の掛け布団に綺麗な花を刺繍した。これで老人の心臓を欣よろこばせようと。が、老人はこれを見ると微笑んて言った。「好い子だのう、だが、ありやわしの冗談だったんじゃ。わしの心臓をしまつてあるのは、——しまつてあるのはな……」。「一体どこにしまつてあるの、父様」。

——「しまつてあるのは、——そ

りや部屋の扉じゃよ」。

すると若妻は、翌日老人が家を留守にすると、部屋の扉を色とりどりの鳥の羽と摘み立ての花でごく綺麗に飾り、幾つも花輪を吊り下げた。老人が帰宅して、これはどういうことだ、と訊くと、彼女は「こうしたのは父様の心臓をいとおしがってあげたいからなの」と言った。「好い子だ、わしの心臓があるのは部屋の扉の中なんぞとはまるきり違うところだて」。そこで若い花嫁はとても憂鬱ゆううつになってこう言った。「ああ、父様、とにかく心臓はお持ちなのね。

それじゃ死んじゃうかも知れないわ。そしたら、わたし、独りぼっちになってしまふ」。老人はこれまで二度娘に話したことを全部繰り返したが、こちらは、そもそも相手の心臓はどこにあるのか教えて欲しいと、改めてやいのやいのと責め立てた。すると老人いわく「ここから遠い遠い、遙か人里を離れたところに、大きな、おそろしく古い教会があつてな、これは幾つもの鉄の扉で堅固に守られておる。教会の周りには深い濠ほが廻めぐらされていて、これには橋が架かつておらぬ。教会の中には一羽の鳥が飛び廻めぐっている。これは食いも飲みも死にもせん。だあれもこれを捕まえることはできん。で、この鳥が生きとる限り、わしも生きとる。なぜって、わしの心臓はこの鳥の中にあるのだからな」。

そこで花嫁は、老人の心臓をいとおしがつてあげることができないので、悲しくなった。独りぼっちしていると時間が長くて仕方がない。なにせ老人はほとんどまる一日中外出していたから。

さてある日のこと一人の若い旅職ツェンツァー人が小屋の傍を通り掛かった。青年は少女に挨拶、少女は青年に挨拶して、お互い相手が気に入った。で、あちらが近付くと、どこへ行くのか、どこから来たのか、と訊ねた。「ああ」と若い職人は溜め息をついて「ぼくはとても悲しいんだ。ぼくにはまだ六人兄さんたちがいて、お嫁さんをもらおうと出掛けたのさ。一番末の弟のぼくにも一人連れて来るようになっていた。でもそれっきり帰って来ない。だから兄さんたち



を探そうと家を出たってわけなんだ」。

「ああ、職人さん」と花嫁が叫んだ。「これ以上先に行くことはないわ。まず座って何か食べたなり飲んでたりして頂戴。それからお話ししてあげる」。そして食べ物と飲み物をあてがいがい、相手の兄さんたちが町に来て、自分の姉さんたちと自分自身を花嫁として家へ連れて帰ろうとしたこと、自分は今お客様になっている相手のお嫁さんに決まっていたこと、老人が自分を引き留めて放さず、他の人たちを灰色の石に変えてしまったことを物語った。こうしたことをなにもかもあからさまに打ち明けながら、娘はさめざめと涙を流した。それから老人は胸に心臓を持っておらず、それはとつてもとつても遠くにある堅固な教会にいる死なない鳥の体の中にある、とも話した。すると花婿はこう言った。

「ぼくは出掛ける。その鳥を探す。もしかすると神様の

お助けでその鳥を捕まえられるかも知れない」。——  
「ええ、そうして。あなたはちゃんとやつてのけられるわ。そしたらあなたのお兄さん方も、あたしのお姉さんたちも元通り人間になれる」。そうしてお婿さんを隠した。なにしろもう夕方になっていた。翌朝また老人が出て行くと、彼女は旅職人のために食べ物と飲み物をどっさり包んで持たせてやり、この冒険にありつただけの幸運と神様の祝福がありますように、と祈った。

さて職人は随分な距離をてくてく歩くと、どうやら朝御飯にする時刻だと思えたので、旅囊りよのうを開き、たくさん

入れてくれてあるのを喜び、こう叫んだ。「おおい、ご馳走を食べようじゃないか。お客になりたい者、寄つといで」。すると職人の後ろで「もおお」と声が出た。振り向いてみると、大きな赤い牡牛がいて言うには「招んでくれたね。わがはい、おぬしの客人になりたいが」。——「よく来てくれた。さ、遠慮なくやつておくれ。ここにあるだけのものはね」。そこで牡牛はのんびり地面に腹這いになり、旨がつて食べて、舌で口を綺麗に舐め回した。満腹すると「まことにどうも忝い。いつか切羽詰った羽目になってだれかの助けが必要になったら、忘れずにおぬしの客人になったわがはいを呼んでくれ」と言い、立ち上がって藪の中に姿を消した。職人はご馳走の残りを包み直すと、更に旅を続けた。また随分な距離を進むと、自分の影が短いところから正午だと思えたし、胃の腑の具合からしても同様と思えた。そこで地面に座り込み、食卓布を拡げると、食べ物と飲み物をその上に並べ、こう叫んだ。「さあさ、昼飯の時刻だよ。一緒に食べたい者はそう言っておくれ」。すると茂みの中で大層がさがさと音がして野豚が飛び出し、「あいよ、あいよ、あいよ」と啼いて言った。「だれか食事に招んでくれたね。それ、おまえさんかね、それからおいらでもいいんかね」。

「いいともさ。ささ、遠慮なくやつておくれ。ありあわせだがね」と旅人は答え、二人とも旨がった。それから野豚は立ち上がって「ありがとさん。おいらが要りようになったら、この豚に声を掛けとくれや」と言い、茂みの中へのそのそ入って行った。さて職人は大層長い道のりを旅し、なんともうんとこさ旅したのだから夕方になり、またしてもお腹が空いた。まだ食べ物の蓄えはあったので、ちよいと遅いおやつなんぞはどうだろうなあ、と考えた。で、また食卓布を拡げ、持っている食べ物とその上に並べた。飲み物もまだあった。そして「一緒に食べたい者は招待するよ。ろくすっぽも何もないけれど」と叫んだ。すると頭上でばっさばっさと重たい羽ばたきがし、雲で翳ったように地面が暗くなった。そして巨大なグライフ鳥が姿を現して叫んだ。「だれかが

下の食事に招んでくれたのを耳にいたした。当て外れではあるまいな」。

「もちろんさ。下りて来て、これで我慢しておくれ。もうたんとは残ってないがね」と若者は叫ぶ。そこでグライフ鳥は着陸し、存分に食べてから「貴公、この身を所望なら、その折は呼ぶがよからうぞ」と言つて、空中に舞い上がり、姿を消した。おやまあ、と職人は考えた。随分早く行つちやつたなあ。教会への道を教えてもらえたかも知れないのに。だって、ぼくはそいつを絶対見つけられそうもないからなあ、と。それから持ち物を掻き集め、眠る前に一丁場歩ひちやうばこうと思つた。でもまださほど歩きもしないうちに、突然向こうにその教会が見え、間もなくその傍に着いた。これはつまり、渡る橋も無くぐるりを囲んでいる、幅が広くて深い濠に臨んでいた。遠道でくたびれたものだから、気持ちの良い休息場所を探してぐっすり眠つたが、翌朝になると、濠を渡りたいもんだなあ、とうずうずして考えた。ええっと、あの赤い牡牛がここにおいて、すごく咽喉が渴いていけば、この濠の水を飲み干しちゃつて、ぼくが渡れるようにしてくれるだろうにな、と。こう願つたとたん、もう牡牛はやつて来て、堀の水をがぶがぶ飲み干し始めた。そこで職人は教会の壁際に辿り着いたが、これはほんとに厚いし、塔はどれも鉄造り。そこで若者は頭の中でこう思つた。ああ、だれかが破城槌はじやうちを持つてればなあ。あの強い野豚だつたらぼくなんかよりうまくやつてのけるかも知れないな、と。するとね、なんと、すぐにあの野豚が走つて来て、烈しく壁にぶち当たり、牙で壁石を一つ崩し取つたじゃないか。一つ外すと、どんどんどん石を壁から掘り返したので、とうとう教会に潜り込めるくらいの大きな深い穴が掘り抜かれた。そこで若者が中へ潜り込むと、例の鳥が飛び廻っているのが見えたが、捕まえることはできなかった。そこでいわく「今グライフ鳥がいれば、きつとおまえを捕まえちゃうだろうに。そのためグライフ鳥なんだけどなあ」。するとすぐにグライフ鳥が来て、すぐに体の中に老人の心臓を入れている鳥を捕まえてくれた。そこで若い職人はこの鳥を後生大事にしまい込み、グライフ鳥の方は飛び去つた。



さて若者は若い花嫁の許に戻ろうとできるだけ急ぎ、夕方になる前に到着して、何もかも話した。お嫁さんは相手にまた食べるものと飲むものをやり、鳥と一緒に寝台の下へ潜り込むように言った。そうすりやお年寄りには分かりませんからね、と。若者は食べて飲むとすぐさまそうした。老人が帰宅して、病気みたいな気がする、どうも調子が良くない、と訴えた。——これはつまり、こやつ的心臓鳥が捕まっちゃったからだけだね。花婿は寝台の下でこれを見て考えた。そりゃ確かにこの爺さん、ぼくには何も悪いことをしたわけじゃない、でも兄さんたちとそのお嫁さんたちに魔法を掛けた、そしてぼくの花嫁を引き留めて放さなかった、これはちつとやそつとの悪さじゃないよな、と。そこで鳥をきゅつと締め付けると、老人はめそめそ泣いて叫んだ。「ああ、なんだか締め付けられるように痛いよう。ああ、死がわしを締め付けるよう。娘や、——わしゃあ死んじゃまう」。そして椅子から転げ落ちて氣を失った。若者は、しくじらないうちに、鳥をぎゅうつと締め殺した。これで老人はてんからおしまい。若者は寝台の下から這い出し、花嫁は老人が教えてくれたあの白い杖を取り、それで十二の灰色の石を叩いた。するとね、なんと、石は元通り六人の兄さんたちと六人の姉さんたちに戻ったじゃないか。それで皆大喜び。抱き合ったり撫でたり、石は元通り六人の兄さんたちと六人の姉さんたちに戻ったじゃないか。それで皆大喜び。抱き合ったり撫でたり、接吻くちづけしたり。そして老人は死んじゃまって、死んだっきり。たとえ生き返らせたくたって、どんな妙薬も生かすことはできなかった。そこで一同引き揚げて、ご婚礼をして、長い年月一緒に楽しく暮らしましたとき。

解題

カール・ミュレンホッフ（一八一八—一八八四）編『シュレスヴィヒ、ホルシュタイン、ラウエンブルク諸公国の伝説、昔話、民謡』*Müllenhoff: Sagen, Märchen und Lieder der Herzogtümer Schleswig, Holstein und Lauenburg*. Kiel 1845. IV, 7, 214<sup>o</sup>.  
 決してドイツの所産ではなく、デンマークやノルウェーで語られたもの。アスビヨルンセンとモーの『ノルウェー民話集』第一卷三七番と同じ。

ヴァルター・シエルフによれば、ベヒシュタインは構成はそのままにしてあるが、語り口をより活き活きとしたものになっている、とのこと。ミュレンホッフにあつては、若者の食事への招待は三日間に亘るが、ベヒシュタインは朝食、昼食、遅いおやつ、と一日に纏めてテンポを早くした。また、ミュレンホッフは家に残された末弟に話を一旦戻すが、ベヒシュタインはあくまでも老人の家の乙女の許を動かず、「さてある日のこと一人の若い旅職人が小屋の傍を通り掛かった」としている。

この物語の中心テーマである「体の外に隠された心臓」は非常に古い。紀元前一三〇〇年のエジプトの「二人兄弟の物語」に既に見られる。

A T 三〇三 A 「六人兄弟、七人姉妹を捜して妻とする」 Six Brothers Seek Seven Sisters as Wives、A T U 三〇三 A 「兄弟、姉妹を捜して妻とする」 Brothers Seek Sisters as Wives + A T 三〇二 A T U 三〇二 「卵の中にある人喰い鬼(悪魔)の心臓」 The Ogre's (Devil's) Heart in the Eggs。

原題 *Der Mann ohne Herz.*

## 一八 裁判官と悪魔

ある町に男が一人住んでいた。箱という箱には金銀財宝がぎっしり。この男自身はとうとうとありとあらゆる悪徳でぎっしり。あんまりろくでなしなので、「死んでも」大地が彼を受け付けないってな奇蹟が起るかも、と人人が思うくらいだった。そればかりじゃない、その上この御仁、裁判官だった。つまり、不正に満ち満ちた裁判官だった。ある市の立つ日(55)のこと、彼は朝方騎馬で外出、所有している葡萄園を検分に出掛けたもの。家に戻る途中悪魔が彼に話しかけた。これは豪華な衣装を纏い、まことに立派な紳士のいでたち。裁判官はこの余所者がだれだか分からず、それを知りたいと思ったので、あまり鄭重(ていじゆう)でもない口調で、あなたはそもそも何人(なんびと)であるか、していずこより参られたのか、と訊ねた。悪魔が答えていわく「わたしがだれでどこから来たのか、ご存じない方がよろしいですよ」。「ははあん」と裁判官はつい言わでもがなことをしゃべり出して「どこのだれ様だろうと、どうしてもわたしは知らずにはおかん。さもなければそなたはおしまいですじゃ。なにしろわたしは当地では力のある男だからの。して、そなたを苦しめようとしかじかかくかくのことをいたすとしたら、わたしにそれを止めさせるような者、止めさせられる者なんぞはおらん。わしの訊問に対しありていに返答いたさねば、生命財産を取り上げますぞ」。——「さように形勢が悪いとあらば」と魔性の者が答えていわく「わが名とわが素性をおおっぴらにしなければなりません。わたしは悪魔です」。「ふうむ」と裁判官は唸(うな)った。「して、ここでの用向きは何じゃな。これも知りたい」。——「ええつとですな、裁判官殿」と魔物が返辞。「今日この町に赴き、正真正銘全くの心底本音で、わたしにくれてやろう、って言われたものを頂戴できる権限を授かりましてね」。

「さあ」と裁判官。「そうするがいて。したが、わたしもそれを実地で検分したい。なにがおぬしに与えられるの

か見たいもんじゃ」。

「わたしの取り分を頂戴する時、そこに居合わせたい、などと言い張らんでいただきたい」と悪魔は裁判官を思い留まらせようとしたが、こちらは口を切つて強力な呪文を唱え、地獄の君主を拘束した。いわく「わしは神と神のあらゆる掟に懸け、神の力と神の怒りに懸け、その他おぬしの一統を束縛する全てに懸け、神の久遠くおんの審判に懸け、おぬしに指示かつ命じる。おぬしは自分に本音で与えられるものを、わしの見えておる前で、いいな、それ以外ではいかんぞよ、貰い受けるように、とな」。

悪魔はびっくり仰天、この恐ろしい誓言せいげんに震え上がり、忿懣かまんや遣る方かたない顔をしたが、なおも言うことには「いやはや、こんな暮らしてなけりやなあ、とつくづく思うわい。あんたはわたしをなんとも強く呪縛したものだ。これほど手ひどく無理強いされたことはこれまでであつたためしはなからう。だがなあ、地獄の君主としてこれまで違たがえたことのない一言を申しておく。頑固に考えを譲らずにおると、おぬしの得にはならぬ。気を変えるがよろしかろうぞ」。

「いや、翻意などいたさん」と裁判官は叫んだ。「そのため何がこの身に起ころうとも、そいつは覚悟せにやあな。とにかく一度見てみたいのじゃ。よしんばわしのこの命に差し障りがあるうとな」。

こうしてご両人、つまり裁判官と悪魔とは連れ立って市に出掛けた。丁度市の立つ日だったから大勢の人出で、裁判官と、このだれやら知る者のいないその同伴者に、そこいら中でなみなみと酒を満した杯が差し出され、返杯を求められた。裁判官はいつもの慣わしで乾杯のお返しをし、悪魔にも把手蓋か付き大杯おを突き出したが、こちらは飲もうとはしなかった。これが裁判官の心底本音ではないことをよく弁わきまえていたからである。

と、たまたま一人の女が一頭の豚を駆り立てて来たのだが、この豚、女の思い通りにならず、あっちこっち好き勝手に動き回つたので、堪忍袋の緒おが切れた女は豚に向かって金切り声でがなつた。「ええまあ、悪魔のところは失せ

るがいい。悪魔がおまえをまるごと持つてつてくれますように」。

「聞いたかな、ご同輩」と裁判官が悪魔に呼び掛けた。「さつさと引つ掴んで、戴いちまえよ」。けれども悪魔の返辞はこう。「残念だけどあのご婦人が言ったのは心底本音じゃない。わたしがあれの豚を頂戴しようものなら、年がら年中恨みつらみを並べ立てることだろう。わたしが貰つていいのは、心底本音でわたしにくれてやろうつて代物だけさ」。

そのあとすぐまた似たようなことがある女と子どもについて起こった。子どもが女の連れて行こうとする方へ歩こうとしないので、この女も金切り声で「悪魔がおまえを攫つて行つて、その頸をねじつちまうといい」と叫んだもの。「聞いたか、ご同輩」と裁判官がまた訊いた。「あの子はおぬしものだ。心底本音で、おぬしにやる、つて言つてるではないか」。

「いいや、とんでもない。あれだつて心底本音なものか」と悪魔が応えた。「わたしがあの言葉を真に受けようものなら、あの女はひどく嘆き悲しんで、子どもを手放すこつちやないさ」。

次に二人が見たのは女だったが、ぎゃあつく喚いてなんともかとも行儀の悪い子どものせいでへとへとになつていた。不機嫌の塊になつた女はとうとう大声を挙げた。「どうしても言うことを聞かないんだつたら、神様の邪な敵の奴めにくれてやる、この餓鬼んちよ」。

「はてさて。今度もあの子を取らないのかね」と裁判官は不思議で堪らずこう訊いた。「わたしにやあのぼうずを戴く権限はありはせぬ。この女は十フント、いや百フント、いやいや千フント貰つたつて、心底本音で子どもをわたしにくれつこない。わたしが頂戴したくても、そりや許されないのだ。だつて、あれは女の心底本音じゃないからな」。

ところで二人が市の丁度真ん中あたりに来た時、そこはひどいごつたがえしだったので、ちよつと足を止めなければならず、押し合いへし合いの中を通り抜けられないでいた。すると一人の女が裁判官に気付いた。この女は貧しく、



年寄りで、病人、そして大層な不幸を背負っていた。婆さんは大きな声で泣き叫び始め、並み居る民衆の前にして次のように烈しくかきどいた。「あなたの身に災いあれ、裁判官。あなたがこんな金持ちで、あたしがこんなに貧乏だつてことで、あなたの身に災いあれ。あなたは罪咎つとがの無いあたしから、神様と人間の慈悲に背いて、あたしを養ってくれたたった一匹しきやいない牝牛を取り上げた。

この牝牛だけがあたしの暮らしの頼りだったんだ。神様が、お亡くなりになったこと<sup>(39)</sup>によって、そして、人間皆とあ  
たしたち哀れな罪びとのためにお引き受けになった厳しい悩みによって、あたしのお願いを叶えてくださるよう、神  
様に切に切にお縋<sup>すが</sup>りするよ。そのお願いってのはね、あんたの体と魂を悪魔が地獄へ連れてってくれますように、っ  
てことさ」。こうした言葉に対して裁判官は何の応答もしなかったが、悪魔がせせら笑って彼をこづき、こう言った。  
「ほらほら、裁判官、これこそ心底本音なのさ。すぐにそのことを分かせて進ぜよう」。そうして悪魔は鉤爪<sup>かぎつめ</sup>を伸ば  
し、裁判官の髪を引っ掴むと、もろとも宙に消え失せた。猛禽<sup>もうきん</sup>が鶏を攫うように。並み居る人人はびっくり仰  
天、賢い男たちはこんな教訓を述べたもの。

「悪魔と交際なさるとは、

賢くないな、市参事殿。<sup>(40)</sup>

悪魔と一緒にうろつきたがると、

ひどい報いを受けるもの」。

#### 解題

ラスベルク男爵ヨーゼフ（一七七〇—一八五五）編『歌の広間——古きドイツの詩集成』Joseph Freiherr v. Laßberg: *Liedersaal, das ist Sammlung altdeutscher Gedichte*, 4 Bde., 1820-25, Bd. II, S.349, 7-48<sup>g</sup>。

A T 一八六「心底本音」。攫われた裁判官（悪魔の代言人）With his Whole Heart. The judge carried off. (The Devil and the Advocate.)  
、A T U 一八六「悪魔と法律家」The Devil and the Lawyer。

原題 *Der Richter und der Teufel*.

一九 椋鳥と小さな湯船



森の中のとある旅籠屋はたごの前に騎馬の立派な青年が乗りつけると、戸口から一人の愛らしい少女が歩み出て、淑やかに挨拶し、ご所望はと訊いた。冷たい葡萄酒を一杯求めると、乙女はそれを持参した。しかし騎馬の青年に飲ませる前に、少女は朱唇を軽く浸して毒見を済ませ、それから飲み物を勧めた。彼が飲んでいる間に、この家の女主人が姿を現した。これは茶褐色の顔をした不快な風采の醜い女。騎馬の男が言うには「やあ、お内儀さん。あんたはまことに愛らしい娘さんをお持ちだな。さようではあるまいか」。——「いいえ、



旦那様」と女主人は返辞。「この女の子はてまえの娘なんかじゃございません。養い子でして、両親ふたおやも生まれ故郷もありません。可哀そうだと思ひましてね、引き取ったんでございます」。

騎馬の男は綺麗な少女がいとおしくなり、馬から下りると、一夜の宿を求めた。それから、少女に洗足せんそくの湯の仕度を頼んだ。この子と言葉を交わしたかったからである。旅籠の女主人は少女に、庭へ行つて、足湯のために迷迭香まんだいろうと立麝香草たちじやうぞうとマヨラナ(62)を摘むよう言い付けた。少女はいそいそとこれに従ひ、行つて葉草を手折たおりにかかった。すると一羽の椋鳥(64)が傍の小さい灌木の上に飛んで来て、囀り啼いてこう語る。「ああ、切ないな、花嫁さん。あなたは、若様の足を小さな湯船で洗え(65)、と言われたね。あなたはこれに入れられてここへ運んで来られたの。父君様はご心労でお亡くなり、母上様はあなたを想ひ、悶え死にをなさりそう。

ああ、切ないな、花嫁さん、みなしごさんは知らないの、

父様、母様、だれなのか(66)」。

温順な少女はこれ聞いてびっくり仰天、悲しくて堪らなくなり、涙ながらに小さな可愛い湯船に洗足の湯の用意をすると、階段を上がつて、若い騎士が待ち受けている部屋にそれを運んで行つた。彼女が泣いているのを見た青年は訊いた。「なぜ泣いてるの、世にも綺麗な娘さん。このわたしでは楽しくなかなれないの」。

「どうして楽しくなれましょう」とこちらは泣き泣き言葉返す。「あたくしが泣いていますのは、あの椋鳥が囀り啼いたことなのです。下のお庭で若様の洗足のために葉草を摘みましたその時に。椋鳥はこう啼きました。『ああ、切ないな、花嫁さん。あなたは、若様の足を小さな湯船で洗え、と言われたね。あなたはこれに入れられてここへ運

んで来られたの。父君様はご心労でお亡くなり、母上様はあなたを想い、悶え死にをなさりそう。

ああ、切ないな、花嫁さん、みなしごさんは知らないの、

父様、母様、だれなのか。』

そこで若様はその小さな湯船を見ると、そこに見えたのはライン河畔の国王の紋章。途方もなく驚いて、叫ぶには「これぞわが父上の紋章盾の図柄ではないか。どうしてかような浴槽がかようにいぶせき旅籠屋に」。

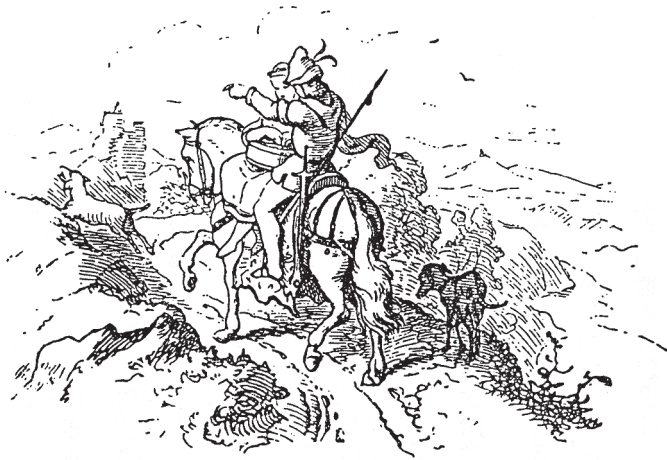
すると外から一羽の鳥がこつこつ窓をつついて啼いた。これはまたもやあの椋鳥。「この小さな湯船に入れられてこの子はここへ運ばれた。」

ああ、切ないな、花嫁さん、みなしごさんは知らないの、

父様、母様、だれなのか。」

その時若様は少女の頸にある母斑ほはを見つけ、喜んで大声を挙げた。「ああ、神様のお恵みを、世にも綺麗な娘さん。そなたはわたしのいとしい妹。そなたの父君はライン河畔の国王だった。母君の名はクリステイーネ。わたしの名前はコンラート。わたしはそなたの双子の兄。それなればこそこの心臓はそなたに対してあれほどの烈しい愛を感じたのだ。初めてそなたを見た折すぐに」。

そこで彼らはお互いの頸つ玉にかじり付き、二人ながらさめざめと泣き、ひざまず跪いて神様にお礼を申し上げ、一晩中



情細やかに語り合つた。夜が明け初めると旅籠の女主人が扉の外から声を張り上げ、皮肉たっぷりにこうどなった。「起きな、起きなよ、お若い花嫁<sup>(67)</sup>、奥さんのお部屋を掃除しな」。しかしこれに応えたのはコンラート殿の声。「この子はお若い花嫁でもなけりや、お内儀<sup>(68)</sup>の部屋の掃除もせぬぞ。お内儀、あんたは手ずからわれらに朝の葡萄酒<sup>(69)</sup>を持って参れ」。女主人が朝の葡萄酒を持って部屋に入つて来ると、コンラート殿は問い糺<sup>(70)</sup>した。「そのほう、何人<sup>(71)</sup>の手から、また、いずこから、この高貴な乙女を引き取つたのだ。これなるはさる国王の息女にしてわがはらからなるぞ」。

女主人は壁の漆喰<sup>(72)</sup>のように蒼白になり、がたがた震えながら跪いたが、一言もしゃべらなかつた。けどその必要もなかつたの。なにせあの椋鳥がまたしても窓辺に止まつて、女主人の悪事をばらしてくれたので。鳥が歌つたはこんな唄。「園生<sup>(73)</sup>の緑の草の中、小さな湯船にいたいけな子どもが座つておりました。片時侍女が離れたら、この邪<sup>(74)</sup>な漂泊<sup>(75)</sup>の女がそこの湯船ごとこの子を攫つて逃げたのです」。

こう聞かされて憤激したコンラート殿は佩劍<sup>(76)</sup>をすらりと腰から引き抜いた。劍は女主人の両耳を片方から片方まで貫いた。それから

王子は世にも麗しいはらからに雅やかに接吻くちづけをして、湯船を手にし、乙女の雪白の手を取って家から外へ連れ出すと、妹を鞍に押し上げた。小さな湯船は乙女が膝に抱えて運ぶことになり、その肩には椋鳥が止まる。こうしてやがて一行はライン河畔の王城に駒を乗りつけた。王城を支配するのは母親の王妃で、皆が城門に入ると来てると、折しも迎えに現れて訝いぶかしそうに訊いたもの。「あらあら、こよなくいとしいわたしの息子。お連れ乙女はどういうお方。小さい湯船をお持ちだね。まるで赤ちゃんがいるみたい」。

「おお、こよなくいとしいわが母上」と若い王子は返辞した。「それなればこそこのお子はそこいらへんの娘じゃなくて、ご息女ゲルトラウトです。ここな湯船に入ったまま母上様から攫さらわれた」。そこで姫君が鞍から下りれば、王妃はどっと込み上げる歓喜のあまり気絶して、子らに抱かれて正氣に戻る。椋鳥はこう歌ったもの。「今日で丁度十八年、王女様が湯船に入ったまんまラインを越えて運ばれてから」。そう椋鳥は歌ったが、またこのようにも続けたの。

「耳が痛いよ、漂泊の女、

もう子どもらを盗めない」。

さて姫君は黄金細工師きんざいくしを呼び寄せて、黄金の格子を鑄くてもらい、湯船の口に取り付けた。そうして例の椋鳥を中に入れると、末永く鳥の世話をしましたとさ。

解題

出典は、ある民謡による、と記されている。

原型は、アヒム・フォン・アルニム／クレメンス・プレントラーノ編『少年の魔法の角笛』（二八〇六一〇八）Achim von Arnim und Clemens Brentano: *Des Knaben Wunderhorn* にある「椋鳥と小さな湯船」Der Star (= Star) und das Badwännlein。しかしながらどうやら全然民謡ではなく、クレメンス・プレントラーノが民謡調で書いた詩と思われる。ベヒシュタインは少少色を付け、更に数箇所を子ども向きに書き換えている。たとえば、少女がお気に召した王子は、プレントラーノの場合、宿の女主人に向かってこう言う。「あの娘をわたしに一夜貸すつもりになってくれるなら、黄金をさなたと与えよう」Wollt ihr mir sie leihen für eine Nacht. / So will ich Euch geben des Goldes Macht. と。また、部屋へやって来た少女が悲しんでいるので、不興になった王子はこうも言う。「おやおや、わたしの花嫁さん、一体何を泣いているの。わたしが夫じゃいけないの」Ach meine Braut, was weinst du dann? / Bin ich dir nicht gut für einen Mann?。

A T、A T U 九三八\* 「結婚しようとした奴隷娘が近親者である」ことを発見する主人」Master Discovers That the Slave Girl He Wants to Marry is a near Relative。

原題 *Star und Badwännlein*.

## 二〇 ころころと丸っこい二人の粉挽き

昔むかし一人の粉挽き<sup>(70)</sup>がいた。自体<sup>(71)</sup>とつても遅<sup>(72)</sup>しく肥<sup>(73)</sup>った体の持ち主<sup>(74)</sup>だったが、それでもなお、刀剣の切<sup>(75)</sup>ったり突<sup>(76)</sup>いたりや、弩<sup>(77)</sup>用の太<sup>(78)</sup>箭<sup>(79)</sup>・長<sup>(80)</sup>弓<sup>(81)</sup>の矢<sup>(82)</sup>からも身<sup>(83)</sup>を守<sup>(84)</sup>れるようにした<sup>(85)</sup>から、なんとも奇妙<sup>(86)</sup>奇<sup>(87)</sup>天<sup>(88)</sup>烈<sup>(89)</sup>な装束<sup>(90)</sup>にくるまった。なによりも先<sup>(91)</sup>ず第一<sup>(92)</sup>に胴着<sup>(93)</sup>を作<sup>(94)</sup>らせた<sup>(95)</sup>が、これの裏地<sup>(96)</sup>にした<sup>(97)</sup>のは石灰<sup>(98)</sup>と砂<sup>(99)</sup>。くっつけるために溶<sup>(100)</sup>かした樹脂<sup>(101)</sup>を流<sup>(102)</sup>し込んだ。背<sup>(103)</sup>中の覆<sup>(104)</sup>いにした<sup>(105)</sup>のは幾<sup>(106)</sup>つかの堡<sup>(107)</sup>籃<sup>(108)</sup>。前<sup>(109)</sup>に張<sup>(110)</sup>った<sup>(111)</sup>のは使<sup>(112)</sup>い古<sup>(113)</sup>しの卸<sup>(114)</sup>金<sup>(115)</sup>と鉄<sup>(116)</sup>製の壺<sup>(117)</sup>の蓋<sup>(118)</sup>。そこで胴着<sup>(119)</sup>はその昔<sup>(120)</sup>戦<sup>(121)</sup>仕度<sup>(122)</sup>を調<sup>(123)</sup>えた騎<sup>(124)</sup>士<sup>(125)</sup>が着<sup>(126)</sup>用<sup>(127)</sup>した極<sup>(128)</sup>めて重<sup>(129)</sup>い胸<sup>(130)</sup>甲<sup>(131)</sup>と背<sup>(132)</sup>甲<sup>(133)</sup>よりも重<sup>(134)</sup>くな<sup>(135)</sup>った。

さて、その上<sup>(136)</sup>に、この粉<sup>(137)</sup>挽<sup>(138)</sup>き、三<sup>(139)</sup>枚<sup>(140)</sup>の襯<sup>(141)</sup>子<sup>(142)</sup>を着<sup>(143)</sup>込<sup>(144)</sup>んだもの。それから胴着<sup>(145)</sup>の下<sup>(146)</sup>には本<sup>(147)</sup>物の鎖<sup>(148)</sup>帷<sup>(149)</sup>子<sup>(150)</sup>を纏<sup>(151)</sup>い、襯<sup>(152)</sup>子<sup>(153)</sup>の上<sup>(154)</sup>にも更<sup>(155)</sup>に鎖<sup>(156)</sup>帷<sup>(157)</sup>子<sup>(158)</sup>を一<sup>(159)</sup>着<sup>(160)</sup>、それからその上<sup>(161)</sup>に九<sup>(162)</sup>枚<sup>(163)</sup>の、シユヴァーベン地方<sup>(164)</sup>の毛<sup>(165)</sup>織<sup>(166)</sup>工<sup>(167)</sup>が今<sup>(168)</sup>日<sup>(169)</sup>でも生<sup>(170)</sup>産<sup>(171)</sup>して<sup>(172)</sup>いるよう<sup>(173)</sup>な粗<sup>(174)</sup>織<sup>(175)</sup>羊<sup>(176)</sup>毛<sup>(177)</sup>地<sup>(178)</sup>の上<sup>(179)</sup>着<sup>(180)</sup>を羽<sup>(181)</sup>織<sup>(182)</sup>つた。粉<sup>(183)</sup>挽<sup>(184)</sup>きがこ<sup>(185)</sup>うした堂<sup>(186)</sup>堂<sup>(187)</sup>たる衣<sup>(188)</sup>服<sup>(189)</sup>の堡<sup>(190)</sup>壘<sup>(191)</sup>を体<sup>(192)</sup>に廻<sup>(193)</sup>らして立<sup>(194)</sup>ち出<sup>(195)</sup>でる——そう<sup>(196)</sup>そう、その際<sup>(197)</sup>四<sup>(198)</sup>本<sup>(199)</sup>以上<sup>(200)</sup>の古<sup>(201)</sup>い革<sup>(202)</sup>洋<sup>(203)</sup>袴<sup>(204)</sup>を重<sup>(205)</sup>ね履<sup>(206)</sup>きして脚<sup>(207)</sup>部<sup>(208)</sup>を保<sup>(209)</sup>護<sup>(210)</sup>した——と、まこと<sup>(211)</sup>に堂<sup>(212)</sup>堂<sup>(213)</sup>とした<sup>(214)</sup>ころころと丸<sup>(215)</sup>っこい<sup>(216)</sup>やっこさん<sup>(217)</sup>にあ<sup>(218)</sup>い<sup>(219)</sup>なり、身<sup>(220)</sup>幅<sup>(221)</sup>は背<sup>(222)</sup>丈<sup>(223)</sup>と同<sup>(224)</sup>様<sup>(225)</sup>なので、ま<sup>(226)</sup>さに玉<sup>(227)</sup>っこころそのもの<sup>(228)</sup>という<sup>(229)</sup>し<sup>(230)</sup>か<sup>(231)</sup>な<sup>(232)</sup>か<sup>(233)</sup>つた。そ<sup>(234)</sup>こ<sup>(235)</sup>で市<sup>(236)</sup>門<sup>(237)</sup>の<sup>(238)</sup>出<sup>(239)</sup>入<sup>(240)</sup>りも無<sup>(241)</sup>理<sup>(242)</sup>を<sup>(243)</sup>せ<sup>(244)</sup>ず<sup>(245)</sup>に<sup>(246)</sup>は<sup>(247)</sup>ほ<sup>(248)</sup>と<sup>(249)</sup>ん<sup>(250)</sup>ど<sup>(251)</sup>で<sup>(252)</sup>き<sup>(253)</sup>ず、身<sup>(254)</sup>動<sup>(255)</sup>き<sup>(256)</sup>す<sup>(257)</sup>ら<sup>(258)</sup>も<sup>(259)</sup>ま<sup>(260)</sup>ま<sup>(261)</sup>な<sup>(262)</sup>ら<sup>(263)</sup>ず、同<sup>(264)</sup>行<sup>(265)</sup>の<sup>(266)</sup>友<sup>(267)</sup>人<sup>(268)</sup>た<sup>(269)</sup>ち<sup>(270)</sup>が<sup>(271)</sup>引<sup>(272)</sup>つ<sup>(273)</sup>張<sup>(274)</sup>つ<sup>(275)</sup>たり<sup>(276)</sup>押<sup>(277)</sup>し<sup>(278)</sup>たり<sup>(279)</sup>し<sup>(280)</sup>な<sup>(281)</sup>け<sup>(282)</sup>れ<sup>(283)</sup>ば<sup>(284)</sup>な<sup>(285)</sup>ら<sup>(286)</sup>な<sup>(287)</sup>か<sup>(288)</sup>つ<sup>(289)</sup>た。例<sup>(290)</sup>年<sup>(291)</sup>聖<sup>(292)</sup>オ<sup>(293)</sup>ス<sup>(294)</sup>ヴ<sup>(295)</sup>ア<sup>(296)</sup>ル<sup>(297)</sup>ト<sup>(298)</sup>の<sup>(299)</sup>教<sup>(300)</sup>会<sup>(301)</sup>堂<sup>(302)</sup>開<sup>(303)</sup>基<sup>(304)</sup>祭<sup>(305)</sup>「大<sup>(306)</sup>市<sup>(307)</sup>」<sup>(308)</sup>に出<sup>(309)</sup>掛<sup>(310)</sup>け<sup>(311)</sup>て、皆<sup>(312)</sup>の前<sup>(313)</sup>に<sup>(314)</sup>姿<sup>(315)</sup>を<sup>(316)</sup>見<sup>(317)</sup>せ<sup>(318)</sup>よ<sup>(319)</sup>う<sup>(320)</sup>と<sup>(321)</sup>い<sup>(322)</sup>う<sup>(323)</sup>こ<sup>(324)</sup>に<sup>(325)</sup>な<sup>(326)</sup>る<sup>(327)</sup>と、物<sup>(328)</sup>の<sup>(329)</sup>具<sup>(330)</sup>に<sup>(331)</sup>身<sup>(332)</sup>を<sup>(333)</sup>固<sup>(334)</sup>め、得<sup>(335)</sup>物<sup>(336)</sup>を<sup>(337)</sup>携<sup>(338)</sup>え、荷<sup>(339)</sup>車<sup>(340)</sup>に<sup>(341)</sup>乗<sup>(342)</sup>つ<sup>(343)</sup>て<sup>(344)</sup>赴<sup>(345)</sup>いた。車<sup>(346)</sup>を<sup>(347)</sup>牽<sup>(348)</sup>く<sup>(349)</sup>のは<sup>(350)</sup>四<sup>(351)</sup>頭<sup>(352)</sup>の<sup>(353)</sup>強<sup>(354)</sup>壯<sup>(355)</sup>な<sup>(356)</sup>牡<sup>(357)</sup>牛<sup>(358)</sup>で、その<sup>(359)</sup>後<sup>(360)</sup>から<sup>(361)</sup>粉<sup>(362)</sup>挽<sup>(363)</sup>き<sup>(364)</sup>の<sup>(365)</sup>在<sup>(366)</sup>所<sup>(367)</sup>の<sup>(368)</sup>百<sup>(369)</sup>姓<sup>(370)</sup>衆<sup>(371)</sup>が<sup>(372)</sup>総<sup>(373)</sup>出<sup>(374)</sup>で<sup>(375)</sup>女<sup>(376)</sup>房<sup>(377)</sup>子<sup>(378)</sup>ど<sup>(379)</sup>も<sup>(380)</sup>を<sup>(381)</sup>引<sup>(382)</sup>き<sup>(383)</sup>連<sup>(384)</sup>れ<sup>(385)</sup>て<sup>(386)</sup>歩<sup>(387)</sup>い<sup>(388)</sup>て<sup>(389)</sup>行<sup>(390)</sup>つた。そ<sup>(391)</sup>し<sup>(392)</sup>て、敵<sup>(393)</sup>が<sup>(394)</sup>出<sup>(395)</sup>現<sup>(396)</sup>する<sup>(397)</sup>た<sup>(398)</sup>び、



要塞や砦とりでに隠れるように、粉挽き殿の背後に潜り込んだもの。粉挽きは二筋の槍と一挺ちようの弩いしゆみで武装、腰には男の身みの丈さかほどもある両手持ちの剣けんを一振り吊たりついていた。それから傍らには一張りの長弓ちゆうきゆうと矢筒やづつが一腰置いてあった。

ころころと丸まるつこい粉挽きが荷車と四頭の牡牛とともに、街道が山越えになつてゐるさる高処たかみまで来ると、いつもそこで何人かの従兄弟たちが妻子を連れて待ち構えており、車を上に押し上げるのに手を貸すのだった。この時に車の前に更にまた六頭の牡牛が先牽きとして付けられた。こうしてやつとこすつとこ、夥しい汗を流して一同粉挽きをつけてペンまで運んだ。山の向こう側を下る段になると今度は、ころころと丸つこいのがまっさかさまにすつてんころりんしないよう、できるつたけ制動機を掛けなければならなかつた。さて一族一党が粉挽きを目的地に到着させると、中身の詰まった大酒樽おほしづみたいに、幾つもの梯子や梃子てこの助けを借り、車から運び下ろされたしだい。それから一同はその周囲に群れ集むつた。たいていはペリシテ人がゴリアテゴリアテを前面に押し立てたようにその後ろに。

さてこうなるとこの丸つこい小麦袋は大層強く、かつ、大胆不敵な人間であることを發揮。こんな話がある。競技者が、片方は剣の先端に林檎を、もう片方は梨りを載のせて争あう気晴らし試合しあひで、大喧嘩おほいどやが起おこつた時、電かみがざざつと穀物畑に降り注つぐように群集の真まつ只中に殴り込み、大勢の百姓衆をひどい目に遭あはせた。けれども頑丈で力持ちの敵が一人向かつて来て、粉挽き目掛けてしたたかな一撃を喰くらわせたので、被かつていた鉄兜てつたうがたちどころに地面に落ち、それを見ていた並み居る一同、頭あたまがそれと一緒に胴体から吹ふき飛とびまつつた、と思つたほど。しかし丸つこい闘士は、相手が下がつて身構みかまえた時、素早く頭を兜たうから抜ぬいて、高い頸甲けいこうの下へ引ひつ込めておいたのであつて、今度は敵に一発お見舞みまいし、これが相手の頸けいに深深と入いつた。草刈り人の大鎌おほいが牧草をざっくりやるように。そこでだれもが、英雄譚いゆうだんで読むような勲いさおしですら戯あそべごとにしか見えない、この膂力りよく無双の男に恐れをなした。

ところで近隣にもう一人粉挽きがいて、これも同様遅おそしくてでつかく、同様ころころと丸つこく、これまたたつぷ

り裏打ちをした金属張りの胴着を着込んでいた。で、どちらも相手が我慢できなかった。なにしろ、どちらも負けず劣らずだったから。二人がお互い唾み合うこともう十年にも及んでいた。彼らが赴く猷堂式〔大市〕のたび鉢合わせをし、口喧嘩やら武器を執つての闘いやらをやらかしたわけ。でもどちらも相手をやつつけられず、ともに三舎を避ける敵同士のままだった。粉挽きの一方には息子が一人あり、もう一方には娘が一人あって、この兩人はお互い同士、父親同士が憎み合っているのと同じくらい愛し合っていた。そこで葛藤はなおさら烈くなったのだが、とうとう温厚で物分りの良い友人たちが仲に入り、二人の粉挽きに、朋友になって、子どもたちを結婚させるよう、こんなと説いた。

二人の粉挽きが同盟を結んだ、しかも自分らの子どもたちを夫婦にしようとしている、との噂が国中に広まると、どうにも不安、心配で堪らぬ、とどこでもかしくでもはらはら、どきどき。だって、よろしいかな、二人の真ん丸なのが、近間にやって来るあらゆるものを、二つの碾き臼みたいにその間で播り潰しちまうだろうとは、だれにだって分かりきったことだったからね。

それにこうなると、片っぱの粉挽きに近づこうものなら、すぐにもう片っぱと関わり合いにならなきゃならない。どんな王侯貴族だってこんな二つの胴着には太刀打ちできない。なぜってどっちの粉挽きも真ん丸な山城みたいなもの。取り囲んでも兵糧攻めにはできっこない。だって、こいつらは胴着の下に少なからぬ粉挽き料金〔「量目の穀物」を貯えていて、これを食い潰すには随分年月が掛かるだろう、てなあんばいだからね。さて、この二人の無敵の勇士はかように雄雄しかつたので、皇帝御自らでさえ連中を征服しようとしたらとても骨が折れただろうが、二人がその大層な腕力を帝国の敵に振り向け、手当・報酬なんぞこれっぽっちも欲しがらず、望んだのはただ闘い争う名譽だけだったのは、まずまずよしとせざるを得なかった。して、二人の唯一の嘆きは、自分たちの評判がまことあまねく広



まっしてしまい、だれもが恐れをなしているため、敵の姿を目にすることなく、あまた数多の日子にっしを費やしている、というこ  
とだけだった。

この二人のころころと丸っこい粉挽きは、同盟を結んでこのかたたくさんの勇猛果敢な偉業を成し遂げた。粉挽き  
たちによって達成されたこうした偉業や冒険の数数を書き物にするとすれば、聖書や世界年代記(9)の二倍も厚い本にな  
ることだろう。粉挽きたちはまた古謡や古譚が物語る英雄たちをひっくりかえしたよりも多くの奇蹟(10)も行った。とどの  
つまり二人は地球の裏の世界の果てにあるさる荒野に住まいを定めた。連中が死んじゃってはいないなら、いまだに  
生きてることだろう。

#### 解題

ラスベルク男爵ヨーゼフ（一七七〇—一八五五）編『歌の広間——古きドイツの詩集成』Joseph Freiherr v. Laßberg: *Liedersaal, das ist  
Sammlung altdeutscher Gedichte*, 4 Bde., 1820-25, Bd. II, Nr. 43. に収録された「胴着」Das Wammes による。ヴァルター・シヘルフによれば、  
ベヒシュタインは少少色を付け、いくらか粗野なタロテスタスをより活き活きとしたものにしてている、とのこと。

A T 一八五三「粉挽きの笑い話」Jokes on Millers、A T U 一八五三「粉挽きに関する逸話」Anecdotes about Millers。  
原題 *Die beiden Kugelbrunden Müller*.

## 二一 三枚の羽

ある男に息子が授かったので、男がこの子の洗礼式に立ち会ってくれる代父パーテのを探したところ、綺麗な少年を見つけた。すぐに男の心はこの少年がいとおしくて堪らなくなつた。で、願ひ事を話すと、その綺麗な少年は喜んで一緒に来てくれ、子どもを聖水盤から抱き上げて、代父のご祝儀として白い若駒を贈ってくれた。さてこの少年はたれあろう、われらが主イエス・キリストに他ならなかつた。

聖水盤の中でハインリヒと命名された男の子はすくすくと成長して父親と母親の喜びの種だったが、やがて青春期に達すると、このまま故郷にはもういたくない、遠くへ偉業と冒険を求めて旅立ちたい、という気になった。そこで両親に暇いそぎを告げると、見知らぬ少年が代父のご祝儀として贈ってくれた仔馬こうまに、これがどれほどの値打ち物か露知



らぬまま、鞍を置いてまたがり、元氣潑潑はつらつ、意氣揚揚と騎馬で世間に乗り出した。ある日のこと、とある森の中を通っていると、なんとね、すぐ道端に孔雀くじやうの抜けた尾羽から抜けたような羽が一本落ちていた。太陽がその羽を照らしているので、多彩な色合いが素晴らしく輝き渡っていた。若者は仔馬を止め、羽を拾い上げて帽子に挿さすため、下馬しようとした。すると仔馬は口を開いてこう言った。「ああ、その羽は地面に置いたままにしときなさい」。若い騎のり手は仔馬が口を利くことができなものだからびびくりし、ぞつと震え上がって鞍に留まり、下馬せず、羽を拾わずに先へ進んだ。暫くすると、とあるせせらぎの岸辺に出た。

するとなんとね、そこには森にあった前のよりずっと美しい、色とりどりの羽が一本緑の草の中に落ちていた。そこで若者はそれで帽子を飾りたくて堪らなくなった。なにせ、これほど壮麗な羽はこれまで見たためしが無かったのだから。でも下馬しようとする、仔馬はまたしてもこう言った。「ああ、その羽は地面に置いたままにしときなさい」。そして若者は、普通はしゃべりはしないのに、仔馬が口を利いたことにまたまた殊の外驚き、今度もその通りにして鞍に留まり、下馬せず、羽を拾わずに先へ進んだ。

さてほんのちよつと経つてから、若者はとある高い山の傍にやって来た。これを登って行こう、と思ったところ、麓の牧草の中にまたしても一本の羽があった。これは若者の考えでは広大な全世界でも一番美しい羽と思われ、なんとしてでも自分のものにしたくなった。そのきらきら輝くさまは真つ青な、そして真緑の寶石さながら、あるいは朝日に照らされた露の雫のようだった。でもまたしても仔馬は言った。「ああ、その羽は地面に置いたままにしときなさい」。今度という今度は若者は馬の言い付けに従うことはできず、忠告を聞こうとしなかった。だって、その魅力的できらびやかな装飾が欲しくて堪らなかったのだから。そこで下馬して、地面から羽を拾い上げ、それを帽子に挿した。すると仔馬は言った。「あらあら、悲しいな、損をするのに。多分後悔するでしょうよ」。それから一言も語らなくなった。さて、若者が更に先へ駒を進めて行くと、立派な家並みの堂堂たる都に着いた。着飾った市民たちが夥しく見え、横笛奏者、釜型太鼓打ち、喇叭吹鳴手をともなつて、たくさんの旗を靡かせた素晴らしい行列が彼に向かつてやって来た。なんとも豪華な観物だった。行列では乙女たちは花を撒いており、四人のこの上なく美しい乙女たちが褥しとに載せて冠を一つ運んでいた。そして都の長老の面々がその冠を若者に捧呈して、こう言った。「万歳、神が送りましたもうた高貴な若人。われらが王になられよ。主なる神の永遠に頌められんことを」。そして人人がこぞって叫んだ。「万歳、われらが王」。若者は頭に王冠を戴せられた時、自分の身に何が起こったか分からぬまま、跪ひざまずいて

神と救世主を讃えた。もし最初の羽を拾い上げていたら、若者は伯爵になっただろう。二番目のだったら、公爵になっただろう。そして三番目の羽を拾い上げなかったら、山の頂上で四番目を見つけたら。そして小馬はこう言っただろう。「この羽を地面から拾いなさい」と。そして若者は権勢あまねき皇帝になり、世界の国国をたくさん支配し、その領国では太陽が没することはなかったら。けれど若者はこれでもとつても満足だった。そして、善良で賢明、公正で温和な王となった。

解題

出典は、ある民謡による、と記されている。

これは一五連からなる歌「代父の贈り物」Patengeschenk, Nr.20 in: Anton Wilhelm von Zuccalmaglio / August Kretschmer: *Deutsche Volkslieder mit ihren Originalweisen*, Berlin 1838-40, S.120。

この物語は本来は讒言されたある王の封臣を主人公とした昔話（伝説では「トリスタンとイゾルデ」型）の断片らしい。当該モティーフはKHM一二六「誠実なフェレナントと不誠実なフェレナント」Ferenand getru un Ferenand ungetru においても見受けられるが、バーダーボルのフォン・ハクストハウゼン家の令嬢である語り手自身にも不明な箇所があったように、はっきり表現されていない。

AT五三二「誠実なファーディナントと不誠実なファーディナント」Ferdinand the True and Ferdinand the False、ATU五三二「利口な馬」The Clever Horse。

原題 *Die drei Federn*。

## 二二 幸せ者のハンス

原題 *Hans im Glücke*.

KHM八三「果報にくるまったハンス（幸せ者のハンス）」Hans im Glückeに相当するため訳出せず。

### 訳注

- (1) ヴァルター・シエルフ Walter Schertl 一九二〇年マインツ（現ラインラント＝プファルツ州）に生まれる。児童文学・昔話研究者。
- (2) ハンス・イエルク・ウター Hans-Jörg Uther 一九四四年北西ドイツのヘルツベルク・アム・ハルツ（現ニーダーザクセン州）に生まれる。文芸学者・口承文芸研究者。ゲッティンゲンの『昔話百科事典』*Enzyklopädie des Märchens* 編集スタッフ上級メンバー。ATU 編纂者。MdW 前編纂者。KHM（一九九六、二〇〇四）、『ハウフ昔話集』（一九九九）、DMB（一八五七版・NDMB（一九九八）などの校訂編纂（いずれもMdWシリーズの一卷））を出版。その他業績は夥しい。

### 一三 黍泥棒

- (3) 黍 *Hirse* 稲科の一年生草本。草丈六〇―九〇センチ。インド原産とされ、中国では古くから主要な穀物で五穀（米・麦・粟・豆・黍または稗）の一つ。果実は食用・飼料。日本には古く朝鮮を経て渡来し、菓子（黍団子）、酒などの原料とされたが、現在ではほとんど栽培されない。ドイツ語圏の昔話で「黍粥」*Hirschenbrei* に出合うことがある。KHM一〇三「甘いお粥」*Der süße Brei* はこれ。黍粥は一般には、オートミールや米の粥のように調理し、ミルク、砂糖、肉桂などを好みで加えたようだ。同量の小麦粉と混ぜてパンにも焼いた。鵜鳥や家鴨など家禽類の肥育飼料としては、水またはミルクと混ぜて煮て使用。黍の籾殻は枕に詰めると快適とされた。ただし黍の栽培は西欧においては粒の大きい穀物の普及によって衰退した。
- (4) 拳銃 *Pistole* イタリア語「ピストローラ」*pistola* から。これはイタリア・トスカナ地方の町ピストイア *Pistoia* で生産されたことに因むか。短い、片手持ちの先込め（前装）式携帯火器。三十年戦争（一六一八―一四八）時代のドイツの傭兵たちは既にこの「短い、火打ち（燧発）式発火装置の火筒」*kurze feuerschlagene Büchse* を携行。十九世紀半ばあたりから雷管付き弾筒を撃針で打って発火させる元込め（後装）式連発拳銃に取って代わられる。

- (5) 偃月刀 *Sabel*。片手で扱う、本来は馬上戦闘用の彎曲した斬撃武器であるこの剣は、遊牧騎馬民族が考案し、愛用したものである。ヨーロッパはフン族（中国の後漢との戦いで利あらず西へ大移動し、二世紀中頃に消息を絶った北匈奴の末裔とされる。四世紀にヨーロッパに現われた。マジヤール人、すなわちハンガリア人の先祖）によって齎された。とりわけ発達したのはハンガリア人、ポーランド人、ロシア人、ロシア南部やウクライナのゴザック族の間（ゴザック族には隣接するイスラム圏からの流入か）。ヨーロッパの軍隊では騎兵、特に軽騎兵の制式刀となった。ドイツ語「ゼーベル」*Säbel*、英語「セイバー」*saber*、フランス語「サーブル」*sabre*は、ハンガリア語「シャブリア」*szablya*、ポーランド語「シャブラ」*szabla*、ロシア語「サブリヤ」*sabrya*（いずれも「刀」「剣」の意）などに由来するか。
- (6) 接骨木 *Holunder*。Fliederとも。忍冬科の落葉灌木。高さ約六メートル。葉は羽状複葉。四月頃、白色の小花を円錐状の花序に密生し、花が咲いた後球状の核果を結び、赤熟。葉の煎じ汁は民間療法で愛用され、ヨーロッパ人に親しみ深い樹木。
- (7) 黍泥棒 *Hirse dieb*。「マルゼンイーブ」。「黍」*Hirse* + 「泥棒」*Dieb*。
- (8) 硝子の山 *der gläserne Berg*。Glasbergとも。普通はその麓に行き着くことさえ極めて難しい遙か遠くの地にあり、行き着いてもつるつる滑るから人力では登れない。以下の昔話などに登場。KHM一九三「太鼓叩き」*Der Trommler*、パウエル・ツァウネルト編『グリム以降のドイツ昔話』所収一一「狐師と白鳥の女」*Der Jäger und die Schwannjungfrau*。> Hrg. von Paul Zaunert: *Deutsche Märchen seit Grimm*. 1912/22. Neuausgabe in einem Band. Bearbeitet und mit Nachweisen versehen von Eilfriede Moser-Rath. Eugen Diederichs Verlag 1976. (邦訳↓鈴木満訳・注・解説「狐師と白鳥の女」武蔵大学人文学会雑誌第三二巻第二・三号)。

#### 一四 黄金の牡のの鹿

- (9) マルガレーテ *Margarethe*。愛称はすぐ後に出るようにグレートヒェン *Gretchen*、あるいはグレートヘル *Gretel*。
- (10) ハンス *Hans*。愛称はすぐ後に出るようにクンスヒェン *Hänschen*、クンスライン *Hänslein*、あるいはクンゼル *Hänsel*。従ってKHM一五、DMB八「クンゼルとグレートヘル」*Hänsel und Gretel*にすぐ思ひ至らう。ハンスとマルガレーテはドイツ語圏でありふれた名である。
- (11) 人喰い男 *Menschenfresser*。日本で人間を食う男・女と申さば、上田秋成の『兩月物語』卷之五「青頭巾」の寺の住持のごとく死んだ愛する美童に対する妄執から、あるいは、劫を経たため、あるいは理由不明で、人肉を喰らう習性を持つようになった人間を例外とすれば、昔丹波の大江山に棲みついた酒呑童子とやらいう鬼神の類だ、と思われるが、ドイツではこのようにまずまず普通の容姿の人喰いが存在したらしい。ドイツ最初にして十九世紀ドイツ最大の絵物語作家ヴィルヘルム・ブッシュ *Wilhelm Busch* (一八三三—一九〇八)の「クンゼルとグレートヘル」*Hänsel und Gretel* (初掲載 *Bilderposen*. 1864) には人喰い男と魔女の夫婦が登場するが、どちらも怪物には描かれていない。フランスの同様の存在「オーグル (人喰い男)」*Ogre* と「オグレス (人喰い女)」*ogresse* も一見してそれと分かるものとは限らない、と思われる。シャル

ル・ペロー著『過ぎし昔の物語あるいはお伽話、ならびに教訓』（一六九七）Charles Perrault: *Les Histoires ou Contes du temps passé. Avec Moralityz* (= *Moralities*) 所収の「眠れる森の美女」*La Belle au bois dormant* では、王と結婚した「美女」の姑、つまり王太后ですな、これが実は人喰い族の出身で、嫁と孫たちを食べたがる。もともと、十九世紀フランスの名高い挿絵画家ギュスターヴ・ドレ（一八三二—一八三三）描く同書所収の「親指（*Le Petit Poucet*）や「長靴を履いた牡猫」*Le Chat botté* の挿絵ではかなり物凄い代物ではあるけれど。DMB三四「ちびっこの親指（*Der kleine Daumling*）」の挿絵はまずまず。

(12) 牡ののろ鹿 *Rehbock* 麋。鹿の一種。脚も頸もほっそりしている。牡は、体長一メートル三〇センチ。体高七五センチ。体重二〇—二五キロ。角はあるが小さい。牝はもつと小柄。ヨーロッパから小アジア・シベリア・中国東北部・朝鮮半島に分布。ドイツ語圏では猟獣として好まれ、秋になると町の肉屋の店頭に、内臓こそ抜いてあるが毛皮が付いたままガラスのような目を見開き、（肉が熟れるように）逆さまにぶら下げられていたりする。

(13) 薔薇色の薔薇がちっくり刺すぞ。／こちらを見ても、こちらを見るな *Rosenrote Rose sucht / Siehst du mich, so sieh mich nicht* 稚拙だが韻を踏んでいる。このような呪文あるいは唄の存在は元来語り物だった昔話では重要。

(14) 鴨ちゃん、鴨ちゃん、集まって、／あたいに橋を架けとくれ、あたいが向こうへ渡れるように *Ihr Entchen, Ihr Entchen, schwimmt zusammen. / Macht mir ein Brückchen, daß ich hinüber kann kommen.* 前掲訳注参照。また、この二つの効力ある呪文あるいは唄のいずれもを女の子のグレートヒエンが唱える設定になっていることには意味があろう。KHM一五「ハンゼルとグレート」*Hansel und Gretel* の末尾近くでも、大きな河ないし湖水 *großes Wasser* に遭遇した二人の子どものうちグレートが水面を泳ぐ白い鴨にこう呼び掛ける。「鴨ちゃん、鴨ちゃん、／あたしたち、グレートとハンゼルよ。／板橋も無きゃ石橋も無いの、／白いお背なに乗せて」*Entchen, Entchen / da siehst Gretel und Hansel / Kein Steg und keine Brücke. / nimm uns auf deinen weißen Rücken.*

#### 一五 痲癩筋の話

(15) 弱麦酒 *Kovent. Kofent* とお。「デュンビア」（弱ビール）*Dümbier* の方言。「修道院ビール」*Kovent. Kofent-bier* の意。修道院（ラテン語 *coen*）の修道士たちに飲み物として供与された薄く弱いビール。英語の「スモール・ビア」*small beer*（木造船時代、水兵、水夫に支給された）に当たる。とにかく、渴きを癒すだけの飲料であって水代わりに過ぎない。旨くもなんともないし、酒としてまことに頼りない、つまらぬ代物。ここではもとより男どもに対する痛烈な嘲りとして用いられている。DMB二「七羽の白鳥の昔話」、DMB三八「ちいちゃん卓子食事の仕度、驢馬公路んばれ、棍棒出て来い袋から」にも出る。

(16) この痲癩持ちのクリームヒルトめ *du böse Chremhild* 叙事詩「ニーベルングンの歌」*Niederungelied* の女主人公のクリームヒルト（普通

Kriemhildと綴る)は殺された夫ジークフリート Siegfried の仇討ちのため、フン族の王エッツェル Ezel (ニアッチラ)と再婚、壮絶な復讐を遂げる。騎士は、この(女傑ではあるが)憤怒に駆られてとことん残忍な行動に出た女性の名を借りて娘の嬌激な性格を罵っている、と思われる。後の方で、この娘の夫となった青年騎士と、娘の母親が互いに呼び交わす場面がある(訳注「エンゲルハルト殿」、「シユレヒトハルトの奥方様」参照)。これも実名ではなく、嘲弄の応酬と取るのが妥当であろう。昔話の登場人物は一般に名を持たない。DMBでは時時そうした場合があるにせよ。もっとも、(全部は挙げないが)KHでも、一五「ハンゼルとクレーテル」Hänsel und Gretel、四八「ズルタン爺さん」Der alte Sultan (これは老犬の名)、五九「フリターとカターリーステン」Der Frieder und das Katherieschen、六九「ヨリンデとヨリンタル」Jorinde und Joringel、八三「幸せ者のハンス」Hans im Glück (「ハンス」は他にもあり)、九五「ビルマフランド爺さん」Der alte Hildebrand、一二六「誠実なフェレナントと不誠実なフェレナント」Ferenand getrü und Ferenand ungetrü、一九八「マレーン姫」Jungfrau Malenといた例はある。また、一九「シユヴァーベン七人男」Die sieben Schwaben では当然ながら——でなければ区別がつかない——七人それぞれに名が付いている。

(17) 三哩 drei Meilen。一マイルは約一・六キロだから、五キロ弱。

(18) 風犬 Windspiel。中高ドイツ語で現代の Windhund のこと。そつで「風 Wind 犬 Hund」と直訳してみた。ね、いかにも速そうでしょ。英名「グレイハウンド」greyhound。体高が高く、ほっそりとした体型で、快足、かつ視力の良い狩猟犬。

(19) 青鷲 Reiher。鷲目鷲科の鳥。大型。頭頂・頸・胸・腹は白色で、後頭部に二本の青黒色の長い毛がある。

(20) 番犬 Hofwart。Hofhund のこと。農場の番をする犬。

(21) 側対歩 Paß。「側対歩」とは、馬の歩調で、同じ側の両脚を片側づつほぼ同時に上げて進むこと。これだと静かな歩行になるので聖職者や女性がかかるのに向いていた。パレードや旅行の場合は、王侯貴族であれ商人であれ、この方が快適だったことは勿論である。このように調教された馬をドイツ語で「ツェルター」Zelter (「側対歩」はツェルト Zeit ともいうので。後掲訳注「側対歩」参照)、英語で「アンブラー」ambler と呼ぶ。騎士が馬上槍試合や戦闘に用いた強壯な戦馬はもちろんこのような調教は受けていない。

(22) 跑足 Trab。「跑足」とは速歩。トロット。

(23) 馬勒 Zaum。馬を操るための馬具で、轡、面繫、手綱の総称。

(24) 馬銜 Gebiß。轡の一部で馬の口にくわえさせる部分。その両端に手綱が結ばれる。

(25) 槍丈で三本ばかり、etwa dreier Speertängen weit。これはヨーロッパで名声を馳せた老練な歩兵であるスイス傭兵の槍(一八フィート)ではなく騎士の槍だが、それでもまず一二フィートといったところか。しかし、英仏百年戦争中のボアティエの戦い(一三五六)で、やむをえず下馬して徒歩で戦ったフランスの騎士たちは二〇フィートの槍を使い易い長さの六フィートに切り縮めた、というから、そんな長大な槍も実戦



に用いられたようだ。槍丈二二フィートで三本分ほどなら、ほぼ一〇メートル。

(26) ツェルト *Zelt* 前掲脚注「側対歩」と同じ。前掲脚注では「パス」*Pass*の語が用いられているが、こちらでは「ツェルト」*Zelt*となっている。

(27) 婦人部屋 *Kemate* *Kemate*とも綴る。中世ドイツの城郭の本丸にあつて暖炉が設けられた居心地の良い部屋。城主の奥方や息女など地位の高い女性たちの部屋に充てられた。閨房。

(28) エンゲルハルト殿 *Herr Engelhart* *Engelhardt*とも綴る。「エンゲル」*Engel*は「エンゲルン」*Angeln*（エンゲル族）、「ハルト」*Hart*は「強さ」「手強さ」。つまり「エンゲル族の勇士」が語源。これはドイツでは普通の姓、または男名。それゆえ、実名ではない、と断じられない。けれども、「豪傑殿」くらいの嘲弄としておつう。

(29) シュレヒトハルトの奥方様 *Frau Schiechhart*。「エンゲルハルト」とは違い、こちらは姓としてまずありそうもない。「シュレヒト」*schlecht*は「悪い」の意。従つて、これは姑の嘲弄に対する婿の当意即妙の応酬に相違ない。この場合、「エンゲル」を「天使」の意とし、善き存在である天使の反対語ともいえる「シュレヒト」を用いたのだろう。なお、ベヒシュタインが「ハルト」にも意味を持たせているとすれば、「シュレヒトハルト」は「悪くて強さ」となる。

(30) グググク殿 *Herr Guguguk*。「郭公鳥殿」*Herr Kuckuck*と呼び掛けるだけでも十分な侮辱（郭公は雌雄ともに貞節を知らない、との俗信がある。また、「ククク」*Kuckuck*は「トイフェル」*Teufel*（悪魔）の代わりに慣用句中で用いられる）だが、更にそれをわざと「ヘア・グググク」と詠る（こ）でもっとひどい効果を挙げていよう。

(31) さもなきヤ——シャーフハウゼンのあの大きな神様のご加護がこの身にありますように——そもじはそのせいで赤っ恥をかいてさんざん諍られるついでに、よなあ *sonst habt Ihr. so mir der große Gott von Schaaften. nur Schande und Spott davon.* シャーフハウゼン *Schaaften*（古い綴りでは *Schafusen*）は、スイスのバーゼル近郊の都市シャーフハウゼン *Schaffhausen* を指す、と思われる。この地保持の下にかつて一四四七年に建立された二二フィートに及ぶ堂堂たるキリスト像があつて、大勢の巡礼者に参拝されていた。が、一五二九年引き倒された。同年シャーフハウゼンが宗教改革に転じたため。このことはそれ以降近世に至るまでドイツ語圏では周知のことだった。そこで姑は、立像が壊されたように、婿の企てが失敗する、とあてこすつたのであろう。

(32) 痲癩筋なるもの *Zornbraten*。原文ではこのように斜字体で強調されている。『グリムドイツ語辞典』には出ている。出典としては古い笑話（*Witz*）でも「あの者からツォルンブラーテンを切り取ろうぞ」*Ich will yhm den zornbraten abschneiden* 云々の文脈において）などが挙げられているが、果たしてかようなものが民間信仰に存在するやいなや。直訳すれば「怒り *Zorn* の焼肉 *Braten*」といったところか。

(33) 鋸草 *Bertram* *Deutscher Bertram = Schafgabe*。西洋鋸草。学名アキレア・ミレフォリウム *Achillea millefolium* など各種。英雄アキレスの負傷の治療に用いられた、という伝承から「アキレア」が総称。菊科の多年生草本。高さ六〇—八〇センチ。初夏から冬にかけて白色な

いし桃色が勝った小頭花をつける。菌の縁は鋸歯状に深く裂けている。花期の全草を乾燥させたものには発汗、解熱、血圧降下、利尿などの働きがある。また全草は収斂、止血作用があるタンニンに富むので、ヨーロッパでは古くから打撲、切り傷に処方された。根は菌痛に効くから、大道菌抜き（後掲注）「ほい、そもじがかような名医だとは……飲み薬には逢も混ぜるのだろうか」参照）の売り物でもあったろう。英名ヤローウ yellow。

(34) 嘔根(おうこん) Nieswurz. 根茎 Wurz の粉末が嘔 Niesen を誘うのでドイツではこう称した。これを喫いで嘔をすると、鼻腔内の粘膜が掃除され、頭がすっきりする（もとより医学的な根拠などないのだが）、と考えられ、市販されていたようだ。学名ヘレボリス・ニゲル *Helieborus niger*（死ニ至ル黒キ食ベ物）。英名クリスマス・ローズ *Christmas rose*。金鳳花科クリスマスローズ属の多年生草本。黒い根茎に有毒成分である強心配糖体ヘレプリンを含有。ヨーロッパではかつて少量を湯下、強心、駆虫、通経などの治療に処方した、というが、毒性が強いので服用は危険。嘔吐、激しい痙攣、呼吸麻痺を惹き起こす。この点昔から日本で知られた強烈な生薬「附子」（毒薬としての名は「烏頭」。やはり金鳳花科の多年生草本烏兜の根茎が原料）にも似ている。なお、日本ではヘレボリス・オリエンタリス *Helieborus orientalis* もクリスマス・ローズと称する。この意味での通称クリスマス・ローズには和名もあって寒芍薬といひ、茶花にも使うそう。

(35) 蓬(よもぎ) Beifuß. フラではおよそく *Dragunbeifuß* = *Estragon* を指す。学名アルテミシア・ドラクンクルス *Artemisia dracunculus*。これは南ロシアや西アジア原産の菊科の多年生草本。ドイツでは昔から栽培されて来た。開花期の茎の先端は香草として用いられる。日本でもフランス名エストラゴン *estragon* で知られている。鶏や魚の料理に相性が良い。古代ギリシアでは蛇毒の治療などに使われ、古代ローマでは疲労回復の薬草とされた。ヨーロッパ中世後半以降ようやく料理に。エストラゴンは、今では、セルフィーユ、パセリと並んでフランス料理の三大香草とされる。血行を良くし、食欲を増進させ、消化を促進するのに効き目がある、とか。

(36) ほい、そもじがかような名医だとは……飲み薬には逢も混ぜるのだろうか。教会堂開基祭 (DMB二〇)「ころころと丸っこい二人の粉挽き」訳注「教会堂開基祭」参照) や歳の市、市の立つ日 (DMB一八「裁判官と悪魔」訳注「市の立つ日」参照) など、中・近世のドイツ語圏で人の出盛る時・所は、いかがわしい香具師や、香具師まがいの自称医者、葉売り、太鼓や喇叭を器しく鳴り響かせて――被施術者にとってある程度麻酔薬代わりの効果があったようだ。哀れな患者の苦痛の叫びをかき消すのが目的だったかも知れないが――やっこで虫歯を抜く大道菌抜きやらの稼ぎ場でもあった。そうした類の連中の口上を、この老女は仄めかしているのだろうか。後出の「長口上」云々とも対応する。

(37) 痲癩肝 Zornieren. 「怒り Zorn の腎臓 Nieren」。中世ドイツにあっては、腎臓は情緒の源泉と考えられた。また、旧約聖書詩篇七章十節では心臓とともに生命力の源泉とされている。従って、痲癩が腎臓にあっても俗信では不思議はない。

(38) おしやべり Klaffer. 役にも立たないことをべちゃべちゃしゃべる者。

(39) へんごち nach der Hand. 一般的な慣用語ではなご。vorderhand = einsteuilen (おしあたって、自分) の反対語。「とべんごち」[結局]。

- (40) 丈夫な繩つな ein Bastchen. 「バスト」Bast (植物の肉皮、韃皮じんぴ)。籠かご、繩などの材料)の縮小形。韃皮纖維は強韌。
- (41) 悪妻持ったら……間に下げりゃあ別だけや。 Wenn wer ein übel Weib hat, / Der tu sich ihr in Zeit ab, / Empfehl sie dem Ritter, / Und leg sie auf ein Schiften, / Und kauf ihr ein Bastchen, / Und henk sie an ein Äschen, / Und henk dabei / Zwei Wolf oder drei, / Wer sah dann ein Galgen / Mit böseren Balgen? / Es sei denn, daß wer den Teufel fing, / Und ihn auch dazwischen hing. 「や、なんとも凄まじい文句ですな。訳していても冷汗三斗。もっと差し障りのない表現に替えられる、とおっしゃるかたは是非どうぞお試しください。既婚男性の皆様、このままじゃあ、お互いとしき妻には見せられませぬよ。え、うちのは悪妻なんかじゃない、ですって。いかにもさようでございます。それなら、これでもまあよろしいかも。」
- 一六 胡桃くるみの小枝
- (42) 燻製塩漬豚腿肉 Schinken. ハム。燻製にはしないもの(生ハム)、豚腿肉を素材にはしないものもあるが、一応これが一般的なな。
- (43) 腸話 Wurst. ソーセージ。
- (44) 家に帰り着いて最初に出会うものをよこすと約束 いわゆる「イエフタの誓い」(英語 Jephthah's vow)である。旧約聖書士師記十一―十四章に出るイスラエルの士師イエフタが神ヤハヴェに、アンモン人との戦に勝利することができれば、帰宅した時家の戸口から自分を迎えに出て来るものを燻祭はんさいの生贄として捧げる、と誓ったことに因む。ところがこれはこの人のたった一人の愛娘だった(十一章三十一―三十九節)。従って、「大したものとは考えず、あることの対価として与えることを誓ったのに、それは思いも掛けぬ大切な存在だった」という誓い、との意味となる。KHM三二「手無し娘」Das Mädchen ohne Händeの導入部はこれ。
- (45) 有翼龍 Drache. ずんぐりむっくりした爬虫類はちゅうりゆうあるいは両棲類の体に蝙蝠のような翼と長い尻尾が付いている。足は四本あるいは二本。残忍で火災や毒気を吹き出す。
- (46) バジリスク Basilisk. ヨーロッパ中世の伝承によれば、雄鶏が生んだ黄身の無い卵を蟻蛙かえが温めて孵すと出て来る怪物。頭部は雄鶏、八本の雄鶏の脚と三つに分かれた蛇の尻尾を持ち、頭に冠を被っている。これに睨にらまれただけで人間は死んでしまう。中近東では雄鶏、蟻蛙、蛇が合体したものと考えられたようだ。
- (47) 無翼龍 Lindwurm. 蛇の仲間に入るのだから、足がある点が異なる。残忍で毒気を吹き出す。
- (48) 白楊 Ede. ポプラの一種。箱柳とも。柳科の落葉灌木。高さ一五メートル。葉は広楕円形で下面は灰白色、扁平で風に動かされやすいから日本では「やまならし」とも言う。ドイツ語圏では「白楊の葉のように震える」が「ぶるぶる震える」の形容として慣用句となっている。

## 一七 心臓の無い男

(49) ほくと出の若い衆わんたちやあい。 Ihr jungen Gieke in die Welt. giekén はチューリンゲンの方言で gücken に当たる。従つて Gieke in die Welt = Guckdielwelt (直訳「世間を見物に出た者」)。従つて「未熟者」「青二才」とも訳せようが、ついでに文脈に添って「ほくと出」とした。「お上りさん」お上りさん「椋鳥」お毛布「赤毛布」。

(50) 氷みたいに鬚ひげや髪かみの白い皺しわくちや爺おや ein alter eisgrauer Hozelmann. Hozelmann の Hozel = Hutzel。これはウター教授の注釈による。ウター教授は更に昔話研究の知識を援用。Hozelmann = Hutzelmännchen = kleines Männchen と解釈している。Hutzelmännchen は Heinzelhännchen ともいひ、小人の一種の名なので、つらに從へば「皺くちや小人の爺」となる。が、ただの「皺くちや爺」でも意味が通るし、リヒターの挿絵では小人として描かれてはいないので、ついでまでの解釈にはあえて踏み切らなかつた。

(51) 旅職人 Wandergeselle. 手工業組合の組合員である親方 Meister は、手仕事を身に付けようとする少年と年季契約を結び、徒弟 Lehling として一定期間修行させる資格を有する。年季奉公を終えた者が職人 Geselle。これは元の親方の許を離れ、自由意志で各地の親方のところに住み込み、伎倆わざづかひに磨きを掛ける。これが旅行期間 Wanderjahre で、この期間親方から親方のところへ旅回りをしているのが旅職人。

(52) あいよ、あいよ、あいよ。 Qui ou ou. 「ウイ」ou はフランス語の肯定の返辞だが、豚や猪の啼き声も「ウイ」と聞こえる。

(53) クライフ鳥 Vogel Greif. 鷲の頭、獅子の胴体、これに翼が生えている架空の動物。ギリシア語「グリユプス」 Gryps から。古代オリエント特にバビロニアおよび北シリアの記念碑には無数の図柄が残っている。これらおよび古代ギリシア芸術においては神性の象徴および守護者として登場。ヨーロッパの紋章では架空の動物としては龍と並んで最も多く用いられる。K H M 一六五「怪鳥グライフ」Der Vogel Greif; では類話における悪魔のような役割だが、こちらが悪魔的存在ではなくて、この手の類話では悪魔がただ超自然的怪物となっただけのこと。

(54) 破城槌 Mauerbrecher. 先端に青銅の牡羊の頭などを装着した重く長い丸太を可動式の櫓に吊るし、前後に揺らしながら被包開都市ないし城塞の壁や門扉に衝き当て、これを打ち破る攻城兵器。アジアでもヨーロッパでも古代から用いられた。

## 一八 裁判官と悪魔

(55) 市の立つ日 Markttag. こうした定期市日には、「市の立つ広場」(ドイツ語圏都市の中心部の広場)へ都市近郊から生鮮食品や家畜・家禽などが運び込まれ、それらを売り買ひする人人目当てに行商人らが露店を出し、更に香具師やかしの類が見世物を行う、といった具合だつた。「市の立つ日」は大いに賑わつたわけ。

(56) 騎馬で外出、所有している葡萄園を檢分に出掛けた。中世ヨーロッパの都市の市壁内には建物しむちが櫛比している。王侯や大司教なら市壁内のその宮殿の傍らに庭園・果樹園を經營する贅沢ができたが、一般市民の場合市壁外でなければ到底無理。もつとも、所有しているだけで大層裕福

なことが分かる。

(57) 把手蓋付き大杯 *Kanne*. 陶器のジョッキに金属製の蓋が付いていたり、全部が金属製だったりする大杯。ビールなら五〇〇CCは入ろう。ここではワイン。このワインは香料や甘味を入れ、熱くしてあるのかも知れない。

(58) フラント *Flund*. ドイツの貨幣単位ではない。ただし、俗に二十マルクのことをそう称したことはある。またネーデルラントでは「フラムン・ポンド Pond」が六グルデンだった。黄金の重量を意味しているなら、現代ドイツでは「フラント」五〇〇グラム。

(59) お亡くなりになったこと *イエス・キリストの磔刑*による死を指す。

(60) 市参事殿 *Rat*. かつてドイツの都市の最高議決機関は市参事会だった。それを構成したのは富裕な商人やギルドの親方など有力市民。わらが裁判官閣下も当然その一人だったわけ。

### 一九 椋鳥と小さな湯船

(61) 迷迭香 *Rosmarin*. ローズマリー。地中海地方原産の芳香ある常緑灌木。貞操、愛、記憶、死の象徴。香油の原料となる。消化器や肝臓の病気に良く効く。仔羊などの焼肉、鳥類、魚類の料理の香付けにも使われる。

(62) 立麝香草 *Thymian*. 木立百里香とも。現在の日本では一般にタイムで知られる。代表的な香草の一種で、古くからヨーロッパで知られ、特に南フランス、イタリアなどの地中海沿岸に多い。丈は三〇センチ足らず、細い枝に五〜七ミリの小さい葉をびっしりと付ける。初夏に咲かせる淡紅紫色（まれには白）の小さな花、および、若い茎も、葉も強い芳香を持つ。生の葉を採ってそのまま使うか、開花期の全草を乾燥して利用する。肉、魚類の料理によく合う。

(63) マヨラナ *Majoran*. 学名オリガヌム・マヨラナ *Origanum majorana*. 英名スウィート・マジヨラム *Sweet marjoram*. 紫蘇科の多年生草本。代表的な香草の一種で、古代ギリシアでは効力ある解毒剤と考えられ、薬草として用いられた。エジプトや南ヨーロッパ、すなわちギリシア、南フランス、イタリアなどの地中海沿岸原産。葉、茎、花に芳香がある。鶯鳥の丸焼きなどの料理に使う香草の他、薬、化粧品に用いる。

(64) 椋鳥 *Star*. *Stare*, *Starmatz*, *Sprehe*, *Spreu* などとも。雀目椋鳥科の鳥。二〇〇種にも上り、その大部分は東半球、それも熱帯に棲息。ドイツには唯の一種、学名ストゥルヌス・ウルガリス *Sturnus vulgaris*、つまり「ありふれた椋鳥」がいるだけ。これは「ホシムクドリ」と日本語に訳されたりするが、ここではあえて「椋鳥」とした。灰褐色。嘴と脚は黄色。羽に白斑がある。体長二〇センチほど。ドイツでは二月あるいは三月から十月および十一月まで滞在。しばしば越冬もする。繁殖期以外は大挙しての群生を好む。声は好ましいが大層おしゃべりで、うるさがることも多い。籠で飼うと慣れ易く、また物真似上手なので、唄を覚えて囀ったり、人語を真似たりする。平地や水辺の森を好み、樹木の空洞、壁の穴などに営巣する。

(65) 洗え Zwagen. zwagen とは、強い洗剤を入れた温湯で洗うこと。  
 (66) ああ、切ないな、花嫁さん、みなしごさんは知らないの、父様、母様、だれなのか O weh du Braut, du Finkelkind / Weist du nicht, wer dein Vater und Mutter sind. 椋鳥がご女に対してなぜ「花嫁」「許嫁」に当たる Braut という呼び掛けをするのかは、解題からお察しあれ。

(67) お若い花嫁 du junge Braut. 女主人は、この娘がびっくり、若い色男の泊り客と一夜しっぼり共寝をしたもの、と思ったので、こう嘲ったわけ。それで椋鳥の唄の中の呼び掛けと符節が合う。

(68) 朝の葡萄酒 Morgenwein. 朝の飲み物としてのワイン。

(69) 漂泊の女 Zigeunerin. ジプシー女。「ジプシー」は英語「エジプト人」Egyptian (十八世紀頃までこの民族自身誤ってそう伝承していたその出自はエジプトだったので)が崩れた俗称 Gypsy。彼ら自身の呼称は「ロマ」roma (複数形)。「ロマ」rom (単数形)は「人間」「男」の意。女性性は「ロマ」romi。十四〜十五世紀頃北西インドからヨーロッパに流入した漂泊民族。ジプシーが嬰兒、幼児を攫う、というのは、ヨーロッパの民衆に広く信じられていたようだ。ドイツ語の「ツイギーナー」Ziguner、「ツイギーナー」Zigner、「ツイギーナー」Zigener は東欧諸民族やトルコ帝国における似た音の呼称に由来するか。現在バルカン地域を中心としてヨーロッパ各地に約一千万人が住む、といわれる。EU は基本憲章で民族・言語などによる差別を禁止する人権規定を定めているが、ロマへの差別感情は根強い。

## 二〇 「クニ」丸ごい二人の粉挽き

(70) 粉挽き Miller. 昔語にはしばしば登場する職業の一つ。製粉業者。ドイツ語圏では風車より水車の方が動力として一般的。ヨーロッパの穀物はおもね粒食には不向きなので、この職業はどこ共同体でも必要不可欠だった。水車小屋を設ける好適な場所の領主が特定の個人にこれを委任する代わり、使用料を徴収するということもあった。この場合は勿論、独立経営の場合も、こうした独占企業は手数料をかなり高額に設定せざるを得なかった、あるいは設定できたので、利用者は粉挽きに好感は持ち難かったらしい。また、預かった穀物の幾分かをこまかく、あるいは、こまかしているのだらう、とも思われ勝ちだったようだ(たとえば、KHM 一七一「みそやさい」Der Zaunkönig 冒頭参照)。更に、粉挽き小屋は水力、あるいは風力利用の適地でなければならぬという立地条件、および、浮遊する粉塵が爆発する危険性の存在、この二点から村落からかなり離れたところに位置していることが多かった。その場合は村落の人間関係から物理的に孤立していたので、疎外され易かったようだ。

(71) 胴着 Wams. この場合は普通のチョッキ(ヴェスト)ではなく、鎧の下に着ける「鎧下」とあいなる。

(72) 樹脂 Pech. 「ベッチ」には二種類あるが、(71)では唐檜属 Fichte (蝦夷松、針樅など)その他の針葉樹から採れる樹脂 Harz の方であろう。

- これは粘着性が極めて強い。べたべたした固体だが、溶かせばどろどろになる。もう一つ、木炭を製造するなど、木材を乾溜することによって得られる粘稠な液体である「ペツヒ」(木タール Holztee)は防水・防腐剤として木造帆船時代、船材、帆綱などの塗料として用いられたし、樹脂と混ぜて靴や樽に塗られもしたが、接着剤としてはあまり効果はあるまい。
- (73) 堡籃 Korb. Schanzkorb のことと解釈した。これはとりわけ都市や城塞の包圍戦などで接近するための塹壕を掘り進める攻撃軍などに用いられた土を詰めた籠。敵の矢玉を防ぐためである。もとより被包圍側や、相對する野戦軍にも使われたが。
- (74) 鎖帷子 Panzer: 「鎧」だが、意訳した。これではなくてはこんなにはめてはてした胴着の下への着用は不可能。「鎖鎧」と訳しても良からう。膝から上までの長上着のような形で、胴を帯で締める。互いに嵌め込みにした鉄の環から成り、丸い網目細工の外観を呈する。
- (75) 粗織羊毛地 Loden. 防寒・防水に用いる厚手の粗織りウール地。
- (76) 市門 Stadtor: 都市を防禦する外壁に設けられた門。門衛のほか税関吏も屯して人人と物資の出入りを取り締まった。
- (77) 聖オスヴァルト St. Oswald. 聖オズワード(祝日八月五日)。イングランドのノーザンブリア王国(六世紀頃ゲルマン人の一部族アングル・アングル族が建てた古王国)の王(六〇五―四二)。キリスト教の洗礼を受け、キリスト教徒として教育され、臣民を改宗させた。スコットランドの修道僧たちによってその名は大陸に広められ、特にアルプス地方で崇拜され、多くの町村がその名に因んでいる。ただし、この名の町はテューリンゲンには見当たらないようだ。ここでは彼に捧げられた教会のことか。
- (78) 教会堂開基祭 Kirchg. Kirtag. Kirchwehag. Kirmes とも。教会が建立され、キリストや聖母マリア、あるいはいはいずれかの聖人に捧げられた日を祝う祭日。ただし、それを理由に歳の市や大市などが開催され、近隣の住人が集まって物見遊山かたがた、家畜や生活必需品、安価な装身具などの売り買いが行われて賑わった。普通十月か十一月の日曜。
- (79) 弩 Armburst. 強靱な弦を一種の巻上げ機(挺子、ハンドル、滑車など)で引いて掛け金に掛け、弦の当たる溝に短く太い箭(や)Bogen を嵌め込み、引き金を引くと、猛烈な勢いでこれが発射される兵器。
- (80) 男の身の丈 Mannslänge. まるか、ねえ、それじや長過ぎる、とお考えの向きは、次の訳注「両手持ちの剣」を参照されたい。(神社奉納用ではなく)実際に使われた、と思われる日本刀にもこれくらいの長さのものは現存する。
- (81) 両手持ちの剣 Zweihänder. Zweihänder. Zweihänder が普通か。十五世紀スイスおよびドイツの傭兵が用いた長大な両刃の剣。平均して長さは五フィート以上あった、という。五フィートとすると、比率から考えて、柄の部分が一フィート、刃身の長さは四フィート(一・二二メートルほど)に及んだことと思われる。刃が波型になっていることもしばしばだった。これは特に「フラムベルク」Erdbeere と称する。
- (82) 長弓 Bogen. 六フィート(一・八メートル余)もの長さのある櫟の木で作る長い弓。これは、熟練した射手が三十七インチ(一メートル近く)もある長い矢 Pfeil を番えて引き絞り、発射する場合、馬上にある騎士の鎖帷子で覆われた大腿部と分厚い革の鞍を貫き、更に馬体に突き

刺さった、という記録があるほど強力。

- (83) ゴリアテ Goliat. ベリシテ人の勇士で巨人。重武装していたが、ダヴィデの投石器の石に額を撃たれて死ぬ。旧約聖書サムエル前書十七章四節、四十九一五十一節。

- (84) 気晴らし試合 Schimpfspiel. 具体的にどんな気晴らし・憂さ晴らしの遊戯なのか未詳。

- (85) 頸甲 Halsberge. 咽喉と胸の上部をびったり覆って保護する鎧の部品。鎮帷子ないし鋼の板。頸の後ろ側にも回したものが多かった。

- (86) 献堂式 Kirchweihtag. 前掲訳注「教会堂開基祭」参照。

- (87) まん丸な山城……兵糧攻めにはできっこない。巨大な火炮、優れた小銃、充分な兵站、銃砲・長槍などの操作に熟達している練度の高い傭兵あるいは常備兵等等、といった莫大な費用の掛かる軍備を所有することのできなかった時代の皇帝、国王、諸侯、自治都市は、数十人の荒くれた部下を擁して要害堅固な山城に籠もり、街道筋に出没しては略奪や身代金目当ての誘拐行為を働く重武装の騎士(盗賊騎士 Raubritter)を攻略することもままならなかった。しかし、中世後期から近世に掛けてヨーロッパに中央集権国家、あるいは膨大な富を持つ都市同盟が成立、経済的な点からもこうした強大な戦力を使いこなせるようになる、これら小さな軍事拠点は漸く破壊されるようになる。

- (88) 粉挽き料金「量目の穀物」Metze. 「メツェ」は穀物などに用いられた昔の量目単位(約三・四リッター)でもある。山城に少なからぬ量目の穀物が貯えられていれば、攻囲しても長期戦になるわけ。ここでは金と穀物の両者を掛けている。

- (89) 皇帝 Kaiser. 神聖ローマ帝国皇帝。

- (90) 世界年代記 die Weltchronik. ニュルンベルクの印刷業者にして書肆・経営者アントン・コーベルガー Anton Koberger (一四四〇/四五頃一五一三) が出版したニュルンベルクの歴史家ハルトマン・シェーデル Hartmann Schedel (一四四〇—一五一四) 著『年代記ノ書』(Liber chronicarum) の豪華版(一四九三)のこと。これには一八〇九点もの木版挿絵が掲載されている。印刷術発明初期の挿絵本の中で特筆大書すべからず。

## 二一 三枚の羽

- (91) 代父 Pate. DMB二二「名付け親になった死」訳注「代父」参照。

- (92) 仔馬が口を利くことができたものだからびっくりし。昔話の世界では日常的世界と非日常的世界の交錯は当然なので、動物が口を利くことに人間が驚きはしない。伝説ではこうなる。

- (93) その領国では太陽が没することはなかった。ハプスブルク家出身の神聖ローマ帝国皇帝カール五世(在位一五二〇—一五六六)はイスパニア国王カルロス一世(在位一五一六—一五六六)でもあった。従ってその領国たるや、西は新大陸の太平洋岸から、東はイタリア半島のいわゆる長靴の踵



（当時ナポリ王国はイスパニア王国領）までの経度に亘っていた。従って事実彼の領国では、どこかで太陽が沈めば、どこかで太陽が昇ったわけである。

結びに一言。

D M B 一三「黍泥棒」の訳注「偃月刀」の東欧語発音の片仮名表記は例によって例のごとく人文学部ヨーロッパ比較文化学科の同僚阿部賢一准教授にご教示を受けた。

今回最もてこずったのはD M B 一五「痲癩筋の話」である。もつとも、訳注「この痲癩持ちのクリームヒルトめ」「エンゲルハルト殿」、「シユレヒトハルトの奥方様」、「さもなきや——シャーフハウゼンのあの大きな神様のご加護がこの身にありますように——そもじはそのせいで赤っ恥をかいてさんざん誇られるって下さいよなあ」は、底本の一つの校訂編纂者ハンス・イエルク・ウター教授 Prof. Dr. Hans-Jörg Uther に直接お伺いを立て、詳細なご教示を戴いたので、日本語表記はともかくとして、注内容の大筋はまず間違いあるまい。「まず」とか「あるまい」などと申すのは、ウター先生ご自身が、まだまだ調べる必要がある、とか、おそらく、とか慎重におっしゃっておられるからだ。もつとも訳注「グググ殿」や「ほい、そもじがかような名医だとは……飲み薬には蓬も混ぜるのだろうのう」は鈴木木の解釈である。また同物語の訳注「ついつい」のドイツ語 „nach der Hand“ は四半世紀来の友人であるフライブルク大学伝説文庫 Sagenarchiv 管理者 Betueuerin ゲルトラウト・マイネル女史 Frau Gertraud Meinel が教えてくださった。

阿部さん、ウターさん、マイネルさん、どうもありがとうございました。

なお本稿は、同じく鈴木満訳・注・解題「ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』(一八五七) 試訳(その一)」「人文学会雑誌」第四〇巻第四号、二〇〇九・三月)と共に、西村淳子武蔵大学人文学部教授を代表とする武蔵大学総合研究所プロジェクト「ヨーロッパ人の外国語力格差と日本における多言語多文化教育」の一環となる「昔話<sup>メルヘン</sup>ないし語りの言語教育的効果」考察に寄与する研究であることを遅ればせながらここに明らかにしておく。試訳は(その三)「人文学会雑誌」第四一卷第二号、二〇〇九・一月発行予定)、(その四)「人文学会雑誌」第四一卷第三・四合併号、二〇一〇・三月発行予定)、(その五)「人文学会雑誌」第四二巻第一号、二〇一〇・七月発行予定)と継続する予定で、(その一)、(その二)を併せ全体としてこの研究を構成する。一応の完結を見てから右の旨を記そう、と考えていたが、それまでにはかなりの日子を要するし、研究の一部でも所論は示唆し得るので、早い機会に公にすることとした。当該プロジェクトにご高配を戴いた関係各位および諸機関に深甚な謝意を表するしだいである。